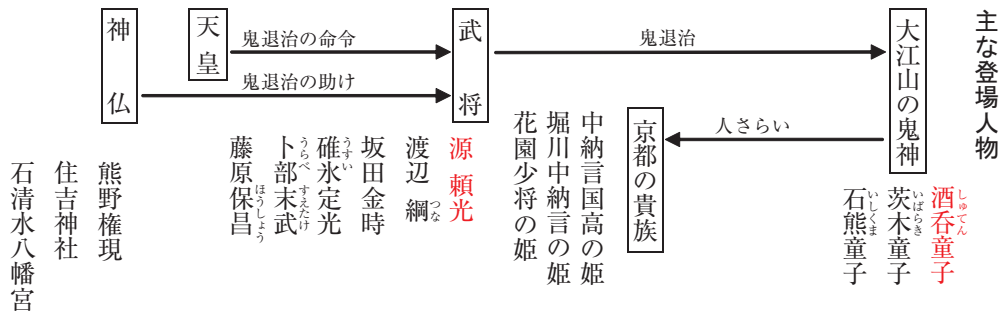


尾口のでくまわし 酒呑童子・大江山

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

酒呑童子・大江山



あらすじ

平安時代中期、一条天皇の時代のこと、京都九条にある羅生門の付近に、毎晩鬼が出るといううわさが広まり、あたりの人々は恐がって出歩けなかった。源頼光四天王の一人渡辺綱が様子を見に出かけていくと、突然鬼が飛びかかってきたが、その片腕を切り落として持ち帰った。が、鬼は綱の乳母に姿を変えて綱の屋敷に入り込み、腕を取り返していった。以後、都では、これらの鬼のしわざと思われる誘拐事件が頻発し、公家のお姫様や女房が多数行方不明になった。そこで、帝は、頼光に鬼退治を命じた。頼光は、家来の渡辺綱・坂田金時・碓氷定光・卜部末武・藤原保昌とともに山伏に姿を変えて鬼の住む大江山をめざして出発した。彼らには、熊野権現、住吉神社、岩清水八幡宮の神々が味方に付けてくれた。大江山の近くで、血のついた布を洗っている女から鬼の居場所を教えてもらい、また、鬼達が誘拐してきた女性の血をすすり、股や腕を食っていることを知る。やがて、鬼の住む城に入り、何度か疑われながらも山伏であると信じさせ酒宴のときに神から授かった神変鬼毒の酒を飲ませることに成功する。酒吞童子が寝入った頃を見はからって一行は鬼達を襲い全員を退治した。そうして、捕われていた女性達を連れて都に帰り、以後この国には平和がもどったのである。



東二口



深瀬

酒呑童子・大江山 初段

- ① 神武天皇以後の歴代の天皇をさす
- ② 一条天皇(九八〇—一〇一〇)。寛和二年(九八六)七歳で即位、道長が権勢を誇り、清少納言、紫式部らの女流が活躍した時代
- ③ 中国で古代の伝説的な皇帝や聖人。三皇五帝とも
- ④ 理想を実現しようとし
- ⑤ 政治全般
- ⑥ 天皇に感謝し。「天恩を」とあるべきところ、「恩」のn音と、次の母音o音が結合したのも。謡曲その他の語り物にはよく出る
- ⑦ 「月」の枕詞
- ⑧ 多くの島々のある国という意味から日本を表す
- ⑨ 京都のこと
- ⑩ 天皇が治める時代
- ⑪ 国を警備する人
- ⑫ あとつぎの男子
- ⑬ 当時の都で、警察と裁判所を兼ねた役所
- ⑭ 役所の長官
- ⑮ 東北地方を治めるための役所
- ⑯ 現在の大坂府と兵庫県の一部
- ⑰ 中央や地方役所の長官
- ⑱ 実在の武将。九四八—一〇二一。以下の郎党たちも実在したが、多分に伝説的存在である
- ⑲ 家来
- ⑳ 現在の静岡県東部
- ㉑ 比べる者がいない
- ㉒ ひっそりと静かなさま
- ㉓ 日暮れに寺でつく鐘

さてその後、ここに人王六十六代の帝をば、一条の院と申し奉る。内には三皇五聖の機を現し、外には万機の政事を正しくして、万民天恩の重んじ、君の恵は久方の、八洲の外もくもりなく、月の都の道広く、治まる御代こそめでたけれ。

その頃天下の守護、清和天皇五代の孫、多田の満仲の御嫡子、檢非違使の別当・鎮守府の將軍、摂津の守源の頼光とぞ申しける。相従う郎党には、渡辺の源五綱、坂田の民部金時、遠江の守碓氷の定光、卜部の式部末武、一人武者保昌とて、以上五人の人々は、武勇の道に誰として、類対の面を合わせる者ぞなき。かの頼光の威勢のほど、うらやまざらんはなかりける。

ある時頼光、屋形に会合あり。春雨の降り暮したるつれづれに、木末の花もほころびて、今日も暮れぬとつげわたる声もさびしき入相の鐘つく頃にもなりしかば、おのおの酒宴始めつつ、

これは、平安時代、第六十六代的一条天皇が天下を治めておられた頃のお話です。

この帝は、中国の古代の帝をお手本にした立派な政治をおこなっておりましたので、そのおかげで、人々は帝に感謝しながら、たいそう満足して暮らしておりました。

その頃、清和天皇の子孫にあたる方で、多田満仲のあとつぎの源頼光という方がいました。檢非違使の別当・鎮守府の將軍・摂津の守など数々の重要な任務についている武将です。また、この頼光の家に、渡辺源五綱、坂田民部金時、遠江守碓氷定光、卜部式部末武、一人武者保昌という人々がいましたが、この五人は特に武術に優れ、勇気があることで有名でした。

ある時、頼光は屋敷で宴会を開きました。春雨が降る季節で、木々の花も咲き始め、日没を知らせる近くの寺の鐘がさびしく鳴り響く頃、酒宴が始まりました。

- ①松の葉や竹を使った照明
- ②庭の中をまがりくねって流れる川
- ③「めぐれ」の縁語。特に意味はない
- ④主人と家来
- ⑤景色などを眺めて楽しむこと
- ⑥武士のつきあい

⑦世間話。雑談

- ⑧いまの帝。今上天皇
- ⑨政治のやり方
- ⑩広く
- ⑪世の中が治まることと乱れること
- ⑫思いのままにする
- ⑬世の中がおだやかに治まること
- ⑭戦乱が収まり、世の中が平和になつて武器を必要としないことのとえ

- ⑮返答の言葉。そうでございます
- ⑯うわさしている
- ⑰平安京の正門で、都の表玄関にあたる。当時はすでに寂しい場所であつた。荒れ果てていた
- ⑱人間ではない荒々しく恐ろしいもの。鬼・変化
- ⑲馬・牛・羊・犬・豚・鶏の六種の家畜
- ⑳きつと

- ㉑その場にいる者すべて

①松明さえぎる曲水の流れに浮ぶさかずきの、めぐれやめぐれ小車くるまの、主従しゆじゆうの遊覧ゆうらん面白おもしろや。兵つわものの交まじわり、頼たのみある中なかの酒宴しゆえんかな。

すでに春はるの日ひもはや暮くれ方がたのことなるに、茶ちやの会かい酒宴しゆえんごと終おわり、よもの話はなしになつて頼らい光こう仰おほせけるようは、

「さても当とう今こんの御政道ごせいどう、天下てんかにあまねく、万民ばんみん光榮こうえいをよろこぶ。我われまた天下てんかの武将ぶしようにそなわり、世界せかいの理乱りらんを掌たなごころにかけ、世上せじやう

すでに静謐せいひつにして、弓ゆみを袋ふくろにおさめしなり。何か世よの中なかにめずらしきことは候せうらわずや。面々めんめんいかに」

と仰おほせける。

その時保昌たまほしやう申まうさるるは、

「さん候せうらう。この頃都ころみやこには、めずらしきことを申まうしならわし候せうらう。

九条くじやうの羅生門らしようもんには、鬼神きせんが住すんで、暮くるれば人ひとを取り喰くらい、牛馬ぎゆうば六畜ろくちくをつかみさく。さるによつてかの辺あたりへ、夜よるに入り、人ひと

の行き交かまうことなしと人皆ひとみな申まうしならわせり。定さだめて方々かたがたも聞きし召めし候せうらわん。面々めんめんいかに。」

と申まうさるる。満座まんざの人々ひとびと「誰だれも聞きいた」「誰だれも」「誰だれも」と申まうさるる。

松明たいまつであたりを照らし、曲水の流れに浮ぶ盃せうがで酒を呑むなど、なかなか優雅ゆわがな宴えんのさまでした。やがて日も暮れ、酒宴も落ちついたころ、人々は世間話を始めました。

頼光らいこうが、

「近頃は帝のおかげで、世の中が穏やかになつたのう。戦乱も収まり、弓矢も使うことはなくなつたが、どうじゃ、皆のもの。何か世間に珍しいできごとはないものか。どうじゃな」

と聞きました。すると保昌たまほしやうが、

「このごろ都には、不思議な噂うわさが流れております。九条通りの羅生門らしようもんに鬼神きせんが住んでいるというのでございます。で、その鬼は、日が暮れると出てきて、人や家畜を取つて食うそうです。そのため、あの辺りの人々は、夜になると外に出ないようにしようと、申し合せているとのこと。もつとも、この噂は、もう皆様方もお聞き及びのはずです。そうですな、皆様。」

と話し始めますと、その場にいた人々は口々に「わしも聞いたぞ。」「わしも。」「わしもじや。」と答えました。

①じつと口を閉じている様子。「へす」は押しつぶすこと
②そらして
③あらゆるものすべてが

④天皇
⑤なんといつても
⑥天皇の住む場所。御所
⑦正門

⑧貴人がお祈りをするための建物。「こがんしよ」とも

⑨御己塔——？

⑩大きな寺院

⑪あまり遠くない昔

⑫平安時代初期の有名な僧である空海が死後に付けられた名前

⑬仏教において仏の悟りの境地や世界観を、仏や菩薩を一定の枠の中に配置して図で示したものの一つ

⑭仏を教えるときに使う語

⑮空海が始めた日本仏教の宗派の一つ

⑯空海が始めた日本仏教の宗派の一つ

⑰仏道修行をする場所

⑱偉い人物や神仏の前、ここでは頼光のこと

⑲必要のないこと

⑳恨み

その中に渡辺の綱一人返答をも申さず、聞かぬ顔にいたり

しが、ひざおし立て、大べしにへしたる唇をきつとそらかし、

「これは保昌の仰せとも存ぜずや。それをいかにと申すに、土

も木も機もわが大君の国なれば、いずちか鬼の住家なるべき。

さすがにあの羅生門は、王城の南門、東西の両寺は桓武天皇

御願所、これまた天下の御祈祷に、立ておかせ給いし大伽藍、

中頃弘法大師、かの寺に住して胎蔵界の曼荼羅、七百余尊を

勧請し、真言秘密の道場なり。かかる尊き目の辺りに、たと

え鬼神が住めばとて、それを住ませて置くべきか。筋なきこと

な申させ給いぞ」

保昌聞いて、

「さてはそれがし御前にていつわりを申すと思し召すか。その

儀にて候わじ。今夜にても行き向って御覽ぜよ」

渡辺聞いて、

「さてはそれがし参るまじきと思し召すか」

その時満座の人々一同に、「これは無益」と止めける。

「いやいや、保昌に対して争う遺恨はなけれども、一つは君の

しかし、渡辺綱一人は、ただの一言もしやべらず、不満げな顔をしていました。やがて耐えかねた様子で、

「これは保昌殿のおつしやることも思えない。この国は帝が立派にお治めしている国なのだから、鬼などが住めるような場所はないはずではないか。それに、あの羅生門のあたりは、都の南にあたるところで、かつて桓武天皇が大伽藍のお寺を建立なされたはず。そののち、弘法大師が住まわれた真言宗の修行寺である東寺（教王護国寺）を建てられた、たいへんに尊い場所ではないか。そんなところに、かりにも鬼などが住んだりなどしたら、帝がそのままにしておくはずがない。証拠もないくだらないことは言わないでもらいたいものじゃ」

と言いつのります。綱は、「なに、では、私がこわがって羅生門へ行かないとでもお思いか」と言い返します。その場に居合わせた人々は「無用のケンカはやめろ」と二人を引き留めにかかります。しかし綱は、

- ①言葉になりにくい気持ちを表した言葉。「ああ」に同じ
- ②証拠
- ③私
- ④本当か嘘か

- ⑤なるほど
- ⑥お前
- ⑦一方では

- ⑧あなたがた
- ⑨拾遺和歌集に出る「みちのくのあだちが原の里塚に鬼こもれりときくはまことか」の歌による
- ⑩福島県にあるとされる地名。鬼婆が住んだという伝説で知られる
- ⑪あなたがた
- ⑫最後の決心をした別れのときの言葉

- ⑬よろい。かつちゅう
- ⑭祖先伝来の宝物。特に太刀をいう
- ⑮太刀を腰につける
- ⑯背の高い
- ⑰馬
- ⑱現在の京都にある地名
- ⑲牛や馬の頭を南に向けること
- ⑳新古今集に出る「照りもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき」をふまえている
- ㉑急に

御為なり。あっぱれ印の札を賜れかし。それがし今晚行き向つて、事の実否を見て参らん」と、

と、はばかりなくこそ申しける。

その時、頼光、綱に向つて、

「げにげになんじが言うごとく、かつは君の御為なり。これを立て置き帰るべし」

と正札を下されける。綱は印を賜り、急ぎ御前をまかり立ちしが、また立ち帰り、

「方々は、人の心を陸奥の、あだちが原にあらねども、こもれる鬼神をしたがえずば、再び面々に面を合わすことあらじ。これまでなり」

と申し切つて、宿所をさしてぞ帰りける。

屋形になれば、物具取つて肩に掛け、重代の劔をはき、丈なる駒に打ち乗つて、人をも連れずただ一騎、二条大宮を南頭に歩ませ行く。冴えもせず、くもりもやらぬ、おぼろ月夜に東寺の前を打ち過ぎて、羅生門に差しかかる。にわかにかき来る風の音に、駒も進まず身ぶるいしてこそ立ったりけり。

「いや、別に保昌に対して含むところがあつて、こんなことを言うのではない。ただ、羅生門へ出かけて行き、もし鬼が本当にいたらば、その鬼を退治しなければならぬから言うのだ。そうすることが朝廷に仕える我々の役目であり、結局は帝の御為にもなるはずではないか。頼光様、どうか、私が羅生門を訪れたという証拠になるような札を、私にお与え下さい。そうすれば、私は今晚、羅生門へ行って、本当のところを確かめて参りますから。」と勇ましく言いました。

頼光は綱に向かつて、「そなたが言うとおり、羅生門へ行くことは、たしかに帝の御為にもなることじゃ。では、この札を羅生門に立てて、もどつてくるがよい。」

と札を与えました。綱はその札を受け取り、急いでその場を去りましたが、すぐにもどつてきて、

「もし鬼神を退治できなければ、皆様とは二度とお会いすることはできません。さらばでござる。」

と言い切つて、屋敷に帰っていきました。

さて、綱は屋敷に着くと、よろいを着込み、一族に代々伝わる劔を身につけ、立派な馬にまたがり、家来も連れずにただ一人、羅生門へ向かいました。あたりは晴れも曇りもせず、ほんやり月が見えるだけです。東寺の前を通り過ぎ、羅生門へさしかかりました。その時、急に風が吹き渡り、馬は身震いをして、一歩も前へ進まなくなつてしまいました。

①よく知られている

②思わず

③身長
④屋根の下はしで、建物の壁より外

⑤太陽と月のように

⑥勢いよく打ったり切ったりする様子

⑦おしげづいて尻込みする
⑧土で造った垣根

⑨様子

⑩悔しがって発した語。「ええい」と同じ意味

⑪左手

⑫天皇や将軍などの住居。ここでは頼光の館のこと

⑬ある事柄を説明するときに、具体的な内容を省略するというのに使う語。こうこう

⑭ここでは頼光のこと

⑮それぞれに。思い思いに

⑯とても大きな岩

⑰折れまがった状態

⑱まったく

綱は馬より飛んで下り羅生門の石段に上がり、印の札を取り出し段上に立ち置き立ち帰らんとせしところに、何かは知らず後ろより、綱が甲を取って引き止め、綱も聞ゆる大力にて、取つたる甲の緒を引きちぎって、おぼえず段より飛び下りける。

その時鬼神怒れる姿を現し、その丈高門の軒に等しく、眼は日月の光り輝き、引きさき喰わんと飛んでかかるを、飛び違えて丁と切る。鬼神片腕打ち落とされ、少しひるみて築地上り、

「やれ次にはその腕取り返さんものを」

と、雲の内にて呼ばわり声して、行く方知らず失せてんげり。

綱この由を見るよりも、

「えっえ、打ちもらしたる。口惜しや」

と、切つたる腕を弓手に引下げ、駒引き寄せてゆらりと打ち乗り、屋形をさしてぞ帰りける。

御所にもなれば、この由かくと申し上ぐ。大将をはじめ奉り、満座の人々とどりにこれを見るに、いかにも太くてたくましきこと、大盤石のごとくなり。爪の先かがまってひとえに

綱は馬から飛びおり、羅生門の石段を上つて、頼光からあずかつてきた札を取り出して、段上に置きました。さて帰ろうとしたところ、背後から何者かが、綱のかぶとをつかんで引き止めます。綱は力持ちで有名でしたから、つかみかかられたかぶとのひもを引きちぎって、脇目もふらず石段から飛び降りました。

その時、怒り狂った鬼が姿を現しました。

その身長は、門の軒の高さほどもあり、その眼は太陽や月のように光り輝いていました。

引き裂いて食ってやろうと綱に飛びかかってきたところを、綱は横にふせぎながら、さつと斬りつけました。鬼はその拍子に片腕を切り落とされ、少しひるんだ様子で塀に上り、

「この次は、必ずその腕を取り返しに来るぞ」と天高く大声がして、行方がわからなくなつてしまいました。綱はこれを見て、

「ええいくそつ、逃してしまった。なんとも口惜しいことだ」

とくやしがりながら、切り落とした鬼の腕をぶら下げて馬に乗り、ゆうゆうと帰って行きました。

綱は頼光の屋敷に行き、これまでの出来事をくわしく話しました。頼光やその場にいあわせた人々が切り落とした鬼の腕を見ると、それはとても太く立派で、巨大な岩のようでした。爪の先は折れ曲がり、まるで竜の手のようにです。

- ①このような
②わざわい。たたり
③用心する
④とりあえずの
⑤ほうび
⑥金、または金箔で飾ってつくるもの
⑦腰にさすつばのない短い刀
⑧源氏に代々伝わる名剣
⑨刀
⑩名譽を得る
⑪偉い人の前から去ること
⑫黄色みをおびた赤色
⑬ふたが上に開く大きな箱で足がついている。衣類や日常に使う道具を入れる
⑭外出
⑮こうして
⑯番人。警護をする人
⑰怪しんで問いたです
⑱怪しいものではありません
⑲現在の三重県中東部の地名
⑳かつていた
㉑長男。ここでは渡辺源五綱のこと
㉒母親に代わって子どもを養育する女

- ㉓誰であつても
㉔今夜
㉕夜遅くなった

竜に似たり。

頼光御覽じて、

「いかに源五、かようの悪鬼は、七日の内には必ずわぎをなすものなり。深く事をつつしむべし。これは当座の引物」

とて、金作りの鞘巻したるひげ切りの、御腰の物を綱にこそ下されける。綱は弓矢の名を上げて、よろこび御前をまかり立ち、わが屋をさしてぞ帰りける。

わが屋になれば、さて鬼の手を朱の唐櫃におさめ、その後は、他行もせず門戸を閉じ、深くつつしみいたりける。

かくてその日も暮れければ、門をしきりに叩く。番の者立ち出で、「あやしや、誰ぞ」とがむれば、

「いやくるしくも候わず。津の国渡辺にありし綱の太郎が乳母なるが、これまで参つて候なり。ここを開けよ」

とありければ、番の者承り、

「いや誰にてもあらばあれ、こよいは夜も更けぬ。明日おいで候え」

と、言い捨て門に入る。

頼光はこれを見て、

「このような鬼神は、七日間もしないうちにかならず戻つてきて、仕返しをするものじゃ。よいか、これからは、身をつつしんで、注意深く行動せねばならぬぞ。しかし、それにしてもみごとな腕前。これは褒美じゃ」

と言つて腰に差していた金で飾りつけられた「ひげ切り」という名の立派な刀を綱に与えました。綱は手柄をたてることができたのを喜び、屋敷に帰っていききました。

屋敷に着くと、その鬼の腕は朱色の唐櫃という立派な箱におさめ、以後、頼光に言われたとおり門を閉じて、大人しく謹慎していました。

その日も暮れた頃、綱の屋敷の門をしきりにたたく音が聞こえます。見張りの者が「誰じゃ。」と尋ねますと、

「怪しい者ではございません。渡辺綱の乳母でございます。ここを開けてください。」

と言いました。見張りのものは、「誰であろうと、今夜はもう遅いから、明日おいでなされ」と言い捨てました。

- ①声の調子
 ②感動のときの声。「ああ」と同じ意味
 ③事の成り行き
 ④本当に
 ⑤馬・牛・豚といった家畜
 ⑥あなた
 ⑦私
 ⑧冬と雪。雪の積もった冬。また、冬のきわめて寒いことのため
 ⑨寝るときに体の上にかける寝具
 ⑩育てた
 ⑪夏の九十日間のこと。夏中
 ⑫あおいで風をおこす道具
 ⑬手を抜かないで
 ⑭年をとったので
 ⑮遠く離れたところ
 ⑯やり方
 ⑰思いやがないこと
 ⑱あれほどに
 ⑲強く勇ましいこと
 ⑳徹底的に
 ㉑説得されて
 ㉒仕方がなく
 ㉓いや、そうではない
 ㉔うそ
 ㉕女性、ここでは「おば」について、尊敬の気持ちを表す
 ㉖性格が強いこと
 ㉗いらっしやる。この場合は「勇ましくていらっしやる」という意味
 ㉘ためす
 ㉙こちら
 ㉚部屋の広さを示す。「間」は長さの単位
 ㉛屋敷

おば、この由を聞き給い、打ち恨みたる声音にて、
 「あらうらめしの次第やな。まことに恩を得て恩を知らざるは、
 ⑤畜類にたとえたり。和殿がおさなきときよりも、みずから
 ⑧守り育て、玄冬素雪の寒き夜は、ふすまを重ね育めり。九夏の
 ⑩天の暑き日は、扇の風に手を去らず、和殿を綱と言わせしこ
 と、みずからが恩ならずや。⑩年老い齡かたむけば、明日をも知
 らぬ命にて、和殿を一目見んために、雲居遠きふるさとより、
 はるばる尋ねきたりしに、門より内へ入れずして、⑩追い返す法
 やある。和殿は邪険の者かな」
 と声⑩を上げてぞ泣き給う。
 ⑩さしにも剛なる渡辺も、あくまでおばにくどかれて、門を是
 非なく押し開き、いやとよこれはいつわりなり。おばこそ若き
 ときよりも御心ただけしくましませば、今もさぞわたらせ給
 うかと、御心を引きみんその為なり。
 「こなたへ入らせ給えや」
 と、四間の亭へぞ招じける。
 おば仰せけるようは、

女はこれを聞いて、ほんとに恨めしいとい
 う様子で、
 「なんとひどいあつかいをするのでしょう。
 恩を受けておきながらそれを忘れてしまうとは、畜生にも劣ります。綱が幼い頃より、わたしはずっとお守り育ててきた乳母なのです。雪の降る寒い夜は布団を重ねてやり、夏の暑い日は夜中じゅうずつとあおいでやったものでした。そなたがこうして立派になったのも、私が守り育てたおかげではありませんか。年をとって、いつ死ぬかわからぬこの身だから、そなたに一目会うために、都から遠く離れた故郷からはるばる訪ねてやって来たというのに、こんなにじゃけん⑩に追い返していいものでしょうか。あなたはなんと恩知らずなひどい人なのでしょう」
 と声⑩を上げて泣いています。
 勇ましい綱ですが、ここまで乳母に激しく言いつのられてはやむをえません。仕方なく門を開いて招き入れることにしました。とい
 うよりも綱としては、「この乳母殿は、若い頃から大変気性の激しい方であったから、今でもそんなふうでいるのだろうか」と、ちょっとこの乳母殿に会ってみたくなったのです。
 「こちらへお入り下さい」と綱は乳母を部屋に招き入れました。
 乳母は言います。

①近頃
②乳母が自分をさしていう語

③思い当たる

④お聞きして

⑤この世

⑥姿

⑦生まれ変わった次の世

⑧運が開ける

⑨相手に呼びかけるときに発するこ
とば

⑩私

⑪扱
い

⑫人を呼ぶときにいうことば。特に
目下の者を呼ぶときに使う

⑬屋根と壁からできる三角形の部分
のこと

⑭だまされ

⑮逃げる者などの後を追う

⑯残念さ無念さ

「この程は打ち続き、和殿がばが身の上、夢見の悪しくは
んべれば、何にても思い合わせることはなきか。」

とある。綱承り、羅生門にて鬼の腕を討つたこと、あり
のままにぞ語りける。おばこの由を聞きしめし、

「誠やらん。今生にて、鬼の形を見し人は、来世はうかぶと聞
くなれば、のう、その鬼の手とやらんを、わらわに一目見せら
れよ」

綱この由を聞くよりも、「叶うまじとは思えども、またも不孝
とあるべきか」と、是非なく腕を取り出だして見せにける。お
ば腕を手に取り、取り廻し、引き廻し、見るよしにもてなし、
斬られし腕に継ぎ合わせ、

「やれ、これはわが手なれば取るぞ」

とて、たちまちに悪鬼となり、破風をけやぶり飛んで出る。

綱この由を見るよりも、

「えっえ、たばかられたり。口惜しや」

と、後をしとうて追つかくる。雲の内にて呼ばわり声して、行方
知らず失せてんげり。綱あまりの本意なさに、雲中に向って、

「私はこの頃毎日、そなたの身の上に悪いこ
とが起こる夢ばかり見ております。何か、思
い当てることがあるのではありませんか。」
そこで、綱は、羅生門で鬼の腕を斬り落とした一
部始終をありのままに話しました。乳母
はこの話を聞き、

「本当かどうかは知りませんが、この世で鬼
の姿を見た者は、生まれ変わった時にきつと
良いことがあるといいます。ねえ、私にもそ
の鬼の腕とやらを見せてもらえないかねえ」

綱は、とてもそんなことはできないと思
いましたが、しかし、気性の激しいこの乳母の
ことです。それを言うときつと、また責めら
れるにちがいありません。しかたなく鬼の腕
を取り出して、乳母に見せることにしました。
乳母はそれを手に取り、振り回したり引つ
ぱったりして眺めていましたが、やがてその
腕を自分の片腕につなぎ合わせ、

「これは私の腕。もらつてゆきますぞ。」
と言う間もなく、あつという間に悪鬼の姿に
なり、屋敷の屋根を蹴破つて飛び去っていき
ました。

綱はびつくりしながらも、
「ええい、だまされたか。残念無念」

と言いながら鬼の後を追いかけてました。しか
し、空の上から大声がするだけで、もう鬼は
行方しれずになってしまいました。綱はあま
りの無念さに、空に向かつて、とどろきわた
る大声で、

- ①お前。妖怪
- ②化物。
- ③精神
- ④超人的な不思議な力
- ⑤青い海
- ⑥仏教の世界観で、世界の中心にそびえるという高い山
- ⑦一番はしのところ
- ⑧勇ましく言い放つ
- ⑨声高にものを言う
- ⑩血のつながる人々の集まり
- ⑪家を造ること
- ⑫原因。理由
- ⑬今まで聞いたことのない話だ

天もひびける声を上げ、

「おのれ変化の身なりとも、わが魂は、神通なれば天地蒼海須彌山の果てまでも、探し出さでおくべきか。遂には退治せんものと、発言放つてののじつたり。

それよりも今の世にいたるまで、渡辺党の屋作り、破風を上げぬ因縁これなり。「前代未聞のためしや」と、皆感ぜぬ者こそなかりける。

「お前がどんな妖怪変化のものであったとしても、天地の果て、海の底まで探し出して退治してやるぞ。覚悟しておれ」と勇ましく叫んだのでした。

今でも、渡辺綱一族の屋敷では、鬼が屋根から逃げ出さないように屋根の造りを工夫するようになったといえます。

この話を聞いた人々は、なんにしても、めずらしく、恐ろしい話だとうわさしあったという事です。

酒呑童子・大江山 第二段

- ①話は変わって
- ②荒々しく恐ろしい鬼
- ③結局
- ④完全に
- ⑤あてもなくうろろと歩きまわる

- ⑥天皇に仕える貴族。くげ
- ⑦皇居の中
- ⑧成人する
- ⑨若い女性
- ⑩美しい
- ⑪成人の儀式のときに初めて髪を結ぶひものこと
- ⑫寝たことよって乱れた髪
- ⑬将來
- ⑭特別にかわいがること
- ⑮男女がひかれあうこと
- ⑯うわさなどを耳にする
- ⑰うわさや評判
- ⑱気にかける
- ⑲現在の千葉県房総半島の中央部
- ⑳皇居内の警護などにあたる役所の
- ㉑上から三番目の地位
- ㉒武士
- ㉓荒々しく言動が下品な男
- ㉔言動や趣味があかぬけていないこと
- ㉕皇居に仕え、個室を与えられていた高位の女性を敬って呼ぶ語
- ㉖結婚を申し出る使者
- ㉗取り次ぐこと
- ㉘貴人の妻。ここでは国高の妻

①さる程に、渡辺の綱は鬼神の腕を討ちしより、世の中静かなりけれども、遂に腕を取り返されしより、全く近国に徘徊し、人の妻子をとることは、都の内にも公家大臣の姫君たち、その数多くとるとかや。

ここに、池田の中納言国高とて、公家一人おわします。ただ一人の姫君あり。陣の内にて人とならせ、若紫の匂い深く、初元結の寝乱れ髪、行末長き御寵愛、はや十三にぞなり給う。さればにや、世の中の情を聞く人ごとに心を掛けぬはなかりけり。

これはさておき、ここに上総の国の住人藤原の将監友年とて、弓取りのありけるが、この姫のことをかねてより聞き給い、やがて使いを立てらるる。「荒男は田夫なり」とてお局に言いふくめ、縁の使いを立てらるる。

やがて国高の屋形に行き、案内請うて北の方に近付き、縁の使いを申し上ぐ。御台聞き召し、

さて、渡辺の綱が鬼の腕を斬り落としたおかげで、世の中は平和になったのですが、鬼は自分の腕を取り返していったので、かえって都のあたりをうろつき回るようになりました。特に身分の高い貴族の姫君たちを、ねらってさらって行くようになったのです。

さてその頃、都に、池田中納言国高という貴族がいました。子供といえは、たった一人の姫君がいるだけです。それはそれは大切に育てていました。姫君は美しく成長し、十三歳になりました。もう人の情けもわかる年ごろで、そろそろよい相手をと、会う人ごとに話していました。

さて、同じ頃、上総の国に、藤原将監友年という武士が住んでおりました。この国高の姫君のことを以前から聞いており、ぜひ妻に迎えたいと、使者を国高のもとへ送りこみました。

使者はまず姫君の母親と会い、友年が姫君との結婚を望んでいると話しました。しかし、母君は、

「うちの娘はもうすでに二条家に嫁ぐことが決まっておりますので、まことに申し訳ありませんが、そのお申し出をうけるわけにはいきません。」と断りました。

- ①なるほど
- ②その通りでしょう
- ③貴族の息子
- ④約束すること
- ⑤おっしゃると

- ⑥天皇家の皇子
- ⑦天皇を支え政務を取り仕切る最高位の官職につく人
- ⑧宮中の
- ⑨世の中で有名な
- ⑩一派。仲間
- ⑪都より東の土地。関東
- ⑫荒々しい野蛮人。都の人が東国の人を見下して呼んだ語
- ⑬理由
- ⑭とんでもない
- ⑮友年の召使いの女

- ⑯腹を立てること
- ⑰太平記巻十五「賀茂神主改補事」による。親が遠ざけなかつたら、こんな恋に恋しく思うことはない、の意。「佐野の舟橋」は歌枕で、「さのみ」を導き出す序
- ⑱「さうむやみと」：「さうむやみと」：「さうむやみと」
- ⑲「さうむやみと」：「さうむやみと」
- ⑳恋しく思い続ける
- ㉑ひたすら恋しく思う
- ㉒未熟でおろかなこと
- ㉓そのようにばかり
- ㉔方法
- ㉕このようになったからには
- ㉖さうでなければ
- ㉗互いに刀で刺し合う

- ㉘残念な
- ㉙お考え
- ㉚寺で雑用に使われる少年僧

「もつともさは候わん。されども、この方の姫のことは、二条の公達へかねて契約ありしことなれば、叶うまじき」

とのたまえば、中納言使いの者に打ち向い、大きに怒って、

「わが娘を望まん人は、院の宮方、関白、天上の公達か、武家にとつては天下の武將、源の頼光の門派なるべし。何ぞ東の

荒夷を婿に取るべきいわれなし」

と、もつての他にのたまえば、使いの女房力なく、急ぎ屋形に立ち帰り、ありのままにぞ申しける。

友年大きに腹立し、「おゆしきげずは東路の、佐野の舟橋さのみやはたえては人の恋わたるべき」と思いこがれ給うにぞ、御憤り深くして、

「我、不肖なればとて、さのみ国高いやしむる道にてなし。この上は国高が屋形に踏み込いで、姫をうばうか、さらずば国高と刺し違えん」

と、太刀押っ取って飛んで出る。

力の介が取り付いて、

「こはもつたない御所存かな。上のお寺の稚児法師、それよ

父親の国高は、大変な剣幕で、

「私の娘は、宮様か、貴族ならば関白にもなるような高い位の方、武士ならば天下第一の武將である源頼光の一族くらいでないかと、嫁にやるつもりはない。国高ごとき東国の田舎者の嫁にするなんてとんでもないことだ」

とはねつけました。使者はどうしようもなく、友年の屋敷に急いで帰り、言われたままを伝えました。

友年は、姫君のことをとても大切に思っていたのですが、これを聞くと激怒し、

「私がいくら田舎ものだとしても、国高ごときにそこまで言われる筋合いはないはずだ。そこまで言うなら、国高の屋敷に踏み込んで、

姫君をさらうか、さもなければ、国高と刺し違えよう」

と太刀を握って、今にも飛び出す勢いです。が、家来の力の介が友年にすがりつき、

- ①すなおでおとなしい
 ②皇室や貴族に仕える武士
 ③公卿・僧侶・神主・医師・学者を指す。武士はよろいを着るとき袖をくくり短くするが、常に長袖の衣服を着るため
 ④すぐれた知恵
 ⑤言葉が過ぎるが
 ⑥勇者
 ⑦人に知られないでいる
 ⑧いなご——？
 ⑨自分で直接相手を斬る
 ⑩時間をあけて
 ⑪静かに落ち着いた様子で
 ⑫急ぎあせる
 ⑬よくあること
 ⑭考えが浅いこと
 ⑮きつぱりと
 ⑯決して決して
 ⑰二度とは言わない
 ⑱刀身と鐔の接する部分。鐔は刀剣に付いている金具
 ⑲かつしかつし 固いものがぶつかってたてる、激しい音を表す語
 ⑳誓いを立てるとき、金属を打ち合わせる。武士は刀の刃や鐔を使用
 ㉑現在の京都市中部と兵庫県東部にまたがる地域
 ㉒家来
 ㉓人間以外の神仏や妖怪が不思議な力によって人の姿に変身する
 ㉔さながら
 ㉕人間の知識では計り知れない不思議な異変

りもなお、やわらかなる公家武士、長袖とたとえたり。まことに関東武者のその中に、勇力人に越え、名知の誉れ取り給い、舌長けれども我々まで、荒男の力士やと言われし者までが、とりこもつてありながら、いなごのような人間に、君の御手は下させ申すまじ。おいて物を御覧ぜよ」と、しつぱりとぞ申しける。

友年、せき立つ胸をおしさすり、

「可がよくこそ申されたれ。若きときの習いにて、恋には誰も急くものぞ。不覚の者と思うべからず。この恋をふつつと思切る。八幡八幡、二言とは継がぬぞ」と、小刀を持って鐔元を、かつしかつしと金打をはったるは、

潔くこそ見えにける。

これはさておき、その頃、丹波の国大江山に住む酒呑童子が眷族に、石熊童子といひし鬼、この由を聞くよりも、

「さて中納言の姫君を、二条殿へ迎えらる。これは良き幸いなり。女と変じ、うばい取り、童子の后にそなえん」

と、あたかも神変不思議なれば、たちまち女の姿と変げ、池田殿

「何ともつたいないことを。命を粗末になさつてはいけません。お寺の稚児にも劣るやわやわとした長袖者の貴族に対して、われわれ関東武者のなかでも人なみ以上に勇気があり、知恵もあると評判のあなた様ですよ。それに、いささかでしやばつた言い方になります、私たち命知らずの家来もついています。そんな我々が、いなごのような人間を相手にさせるようなことはさせません。あなた様ももう少し大人になって考えてください」と、静かにいさめたのでした。

友年は、この言葉に、はやり立つ気持ちも収まり、

「よくぞ申した。若いせいで、恋がからむとつい急いでしまうものじゃ。おろかもと思つてくれるなよ。もうわしは、この恋をきつぱりと思切ることにした。八幡様の神にかけて誓うことにする。以後もううそはつかぬ」と、神との約束のしるしに刀の鐔元を、かつしかつしと打ち鳴らす様子は、まことにいさぎよいものでありました。

ところで、この話しを聞きつけたのが、その頃、丹波の国大江山に住んでいた酒呑童子の家来の石熊童子という鬼です。

「なに、中納言の姫君を二条殿が迎え取るといふのか。これはいいチャンスじゃ。女に化けてうばい取り、酒呑童子の后として差し出すことにしよう」

①準備
②きちんと準備する

③あ
④一条もどり橋 京都市一条、堀川にかか
⑤現在の京都市南区にある寺
⑥現在の京都市左京区修学院から比叡山延暦寺を経て滋賀県大津市坂本に至る道
⑦現在の京都市右京区にある山の名
⑧人間以外の生き物
⑨怪しい姿。この場合は鬼を指す

⑩それでは
⑪だまして
⑫戦いの準備をしる

⑬混乱して大騒ぎした
⑭悪い行いはすぐに世間に知れ渡る
⑮よくあること
⑯悪口
⑰私
⑱計画
⑲貧弱な公家たち
⑳身分
㉑自分に力がないことをわきまえないで、強者に刃向かうこと。蟻螂とはかまきり、竜車とは天皇が乗る車のこと

の屋形へ行き、案内請うて対面し、
「幸い今日最上吉日、姫君を送り給え、との二条殿よりの御使」と申しける。国高もとより約束の事なれば、祝儀の装い引きつ
くろい、二条殿へぞ送らるる。

件の鬼ども、一条もどり橋にて、受け取り渡しの儀式をして、
二条殿へは行かずして、東寺の今道より、愛宕の方へ行くか
見えしが、お供の侍、女房どもは、異類異形の姿となり、行方
知らずに飛んで行く。

これはさておき、二条殿より、誠の使いぞ立ちにける。国高
驚き、

「さては友年めが、たばかりとつたるに疑いなし。押し寄せて
取り返さん。馬に鞍おけ。物具せよ」
「承り候」と上を下へと返しける。

悪事千里を行く習い。友年聞いて力の介を招き寄せ、
「姫をくれぬのみならず、雑言吐きしこと、それさえ無念に思
いしに、無実を与え、それがしを滅ぼさんとのくわだて、やせ
公家ばらが分として、武家に弓を引かんこと、蟻螂が斧を持つ

と、言うなり、鬼のことですから、たちまち
のうちに女に姿を変え、池田殿のお屋敷へ行
き、案内を請い、

「今日は吉日でございますから、二条殿より
姫君をお輿入れいただきたい、ということでご
ざいます。私はその使いでやってまいりま
した」

と申しあげました。国高はもともと約束して
あったことですから、姫君の婚礼の衣裳を調
え、二条殿へと送り出しました。

この鬼たちは、一条もどり橋のあたりで、
姫を受け取り、二条殿へは行かず、東寺の今
道から愛宕の方へ行くようにみえましたが、
たちまちお供の侍も女房たちも異類変化のも
のになり、行方も知らずに飛んで行ってしま
いました。

そのあと、池田殿へは、二条殿から本当の
使いがやって来ましたが、とりかえしがつき
ません。国高はびっくりして、

「さては友年のやつが、だまして奪い取って
行ったにちがいない。攻め寄せて取り返そう。
さあ、馬に鞍を置け。武器を用意せよ」
「わかりました」

とみな戦いの準備を始めました。

悪事千里と言いますが、友年方にこの動き
はすぐに伝わりました。力の介を招き寄せ、
「姫をくれただけでなく、悪口のありつた
けを吐いて、それさえも無念に思いつつ我慢
したのに、とうとう無実の罪で我々を滅ぼそ
うという。やせ公家ごときが、我々武家に弓
を引くとは、まさに蟻螂に斧のたとえどおり。

- ① さあ
- ② こちら
- ③ 大勢のものが散りぢりになって逃げていく
- ④ 了解しました
- ⑤ 武器
- ⑥ 衣服などを無造作に着る
- ⑦ 無理矢理連れて行く
- ⑧ 午前二時ころ
- ⑨ 攻めよせる

- ⑩ 軍勢
- ⑪ 京都市の市街地中央部を南北に流れる川
- ⑫ 周囲を取り囲む
- ⑬ 入り乱れて、体をぶつけ合うようにする
- ⑭ 戦いの始めに。全軍で発する大声
- ⑮ すみやかに
- ⑯ 相手に注意をうながすときの言葉。そらそら

- ⑰ 家来
- ⑱ 問題がない
- ⑲ 理由
- ⑳ くわしく
- ㉑ お聞きし
- ㉒ 少しばかり
- ㉓ そうでなければ
- ㉔ やってきました
- ㉕ 念をおした
- ㉖ 人に呼ばれて返事をするときの言葉
- ㉗ ありがたくも
- ㉘ 身分や官位が高い方々
- ㉙ どうして
- ㉚ 正しいやり方ではない様子
- ㉛ 道徳上守るべきやり方

て、竜車に向かうに似たるべし。いざこなたより押し寄せ、蜘蛛の子を散らすよに、片端よりふみつぶさん。用意せよ」

「承り候」と、物具おつ取り、なげかけなげかけ着るままに、馬を引き立て引き立て打ち乗り、「夜は何時ぞ」「八つの頃」「時分はよきぞ」と寄せかくる。

両方より寄せる勢、二条堀川をつつみ、川をへだててもみ合わせ、関の声をぞ上げにける。関の声も静まれば、さて両方より馬をはたはたと乗り合わせ、力の介が前に言葉をかくる。

「それそれ敵と見た。名を何と言うやらん。我はこれ上総の国友年が郎等小林力の介盛光という者なり。子細なき友年に、憤りをふくまるる、意趣をつぶさに承り、相手もあらば、そと組んで見申そう。さなくば片端より、鷲が雀をつかむように、拾うて御目にかけんため、まかり出ばって候」

と言葉に釘をぞ打ちにける。「おつお、聞いた聞いた。これは国高が郎童に、今川右門成遠という者なり。かたじけなくも上つ方へ、御契約ありし姫君を、何ぞや東の荒夷の分として、理不尽にうばい取りしこと、仁義

どうなるか思い知らせてやる。さあ、こちらから攻め込んで蜘蛛の子のように追い散らせかたつばしに踏みつぶしてやれ。さあ、すぐに用意せよ」

「わかりました」と、走りながら武器を用意し、馬を引き立て、「いま何時だ」「八つです」「真夜中なら攻めるのにちょうどよい。さあ。」と攻めかかって行きました。

両軍の軍勢が対戦したのは、二条堀川のあたりです。互いに川をへだててもみ合い、ときを声をあげていきました。さて両軍から互いに名乗りを上げていきます。まず、友年軍から力の介が前に進み出て来ました。

「さあよく聞け。私は上総の国、友年の家来小林力の介盛光である。無実の友年殿を怒らせたのはそちらの方。お怒りになるのは私も当然だと思ふ。さあ、私の相手をするものは、いざいざかかってまいれ。かかって来ないならこちらから、鷲が雀をつかむように、ひろって行くが、よいか」と言い放ったのです。

「おお、聞いたぞ聞いたぞ。私は国高殿の家来の今川右門成遠と申すもの。恐れ多くも、すでに約束してあった我が家の姫君を、東国の田舎武者が無理やりうばい取るなどとはまことに道にはずれたふるまい、早く姫をわたせ。どうなるうともしらぬぞ。命が惜しかったら早く姫を返せ。返せ」

- ① 連中
- ② 人を捕らえて、しばらく上げる
- ③ すぐに後悔するだろう

④ 相手を悪くいう

⑤ あわて者

⑥ どうして

⑦ 心

⑧ お前達の

⑨ 心に照らし合わせて

⑩ 推察

⑪ このような

- ⑫ そのような所
- ⑬ 一尺は約三十七センチメートル
- ⑭ 基準を超えている様子
- ⑮ 戦いのときによろいの下に着た衣

⑯ 戦場

⑰ 鉄

⑱ 家来のうち武勇や才能が最も優れている四人の称。ここでは渡辺綱・坂田金時・碓氷定光・卜部末武をいう

⑲ このような

⑳ 無礼

㉑ 皇居

㉒ 遠慮せず

㉓ 都の中

㉔ 天皇

㉕ いないように軽く見たりあつかつたりすること

㉖ ため

㉗ 皆様方

㉘ この場にふさわしくない

㉙ 一般に

やぶるる輩者、急ぎ姫をわたすべし。からめ取られて後悔く
びすをめぐらさじ。命惜しくばはや返せ。返せ、返せ」

④ とののじつたり。盛光聞いて、

「やれ、うろたえ者、よく聞け。仁義を正す武士が、たとえ女の
気に入らずばとて、など心底はくずさぬぞ。己ばらが心に引
き当て、浅い推かな。侍たるべき者が、かかる無実あう上は、
いや取ったぞ取らぬの返答には及ばぬぞ。あれ、けちらせ、者
ども」

と、「承り候」と、敵味方が入りみだれ、火花を散して戦い
ける。

⑫ しかるところへ、六尺ゆたかの大の男、直垂の裾を結んで
肩にかけ、くろがねの棒をつき、陣中へ飛んで入り、
「静まれ静まれ。せくまいせくまい。これは四天王の内、遠江
の守定光という者なり。頼光よりの御使なり。何故もってかく
狼藉には及ばるるぞ。内裏間近きあたりにて、王位をもはば
からず、洛中をさわがせ給うは、上をないがしろにし給うゆえ
なり。方々もってしかるべからず。総じてこの頃上つ方の姫君

と大声を上げました。力の介はこれを聞いて、「ええい、このうろたえ者め。よく聞け。義を大切に
する武士たるもの、たとえ女にさらわれたからといって、そんな無法なことはせぬぞ。勝手に邪推して、罪もない我々に罪をなすりつけるとは。侍たるもの、こういう侮辱に
対しては、もう取った取らぬの話ではない。武力でこたえるまでじゃ」と言う

「承知した」と、以後は敵味方入り乱れ、火花を散して戦いました。

そこへ割って入って来たものがあります。六尺に余る大男、直垂の裾を結んで肩に掛け、鉄の棒をついて、戦いの真ん真ん中へ飛んで入り、
「静まれ、静まれ。あわてるな。私は頼光四天王の一人、遠江の守定光である。頼光よりの使としてここに来た。なにゆえに、都の中でいくささわぎを起すのじゃ。帝のお住まいも近いというこの場所、いくさをするなどとは、帝をないがしろにするふるまいであるぞ。すぐにここを引き払え。このところ、姫君たちが行方不明になる事件が相次いで起こっている。その原因は、いづれ、帝により解明されるはずじゃ。いづれにせよ、もういくさはやめよ」

① 限りなく多い

② 天皇の命令を伝える文書

③ 真実をつきつめて明らかにすること

④ 押さえとどめる

⑤ 一言のもとに。一挙に

⑥ 軍隊

⑦ 行動

⑧ 身分の高い者も低い者もみんな
⑨ 皆同じくして

たち、失せさせ給うことその数を知らず。事の疑わしきことあらば、宣旨をもつて後日に究明あるべし。まずまず戦をやめられよ」

と、定光しきりに制すれば、両方一句につめられて、国高友年たがいに陣をさつと引く。

かの定光のふるまいを、上下万民おしなべ、感ぜん者こそなかりける。

という定光の言葉に、双方返す言葉もなく、国高軍も友年軍もいっせいに軍勢を引き上げたのでした。

この時の定光の仲裁ぶりはまことにみごとであったと、天下の人々はすべて、感心しいものはなかったということです。

酒呑童子・大江山 第三段

- ① 接続詞。さて。こうして。それから。
- ② うそ。
- ③ もう一度。再び。
- ④ 弓と矢。転じて、武器を指す。ここでは、第二段の最後に定光がその場を収めた後は、互いが再び戦うことはなかったという意。
- ⑤ 有名だ。世の中に広く知れ渡っている。
- ⑥ 優れている。すばらしい。
- ⑦ 律令制において、大学寮・陰陽寮などにいた教官のこと。ここでは陰陽寮にいた博士を指す。陰陽博士は天文学や暦などを教えたほか占いもした。
- ⑧ 呼び寄せなされた。お呼びになられた。
- ⑨ 位の高い人物の妻を指す敬称。御台所。
- ⑩ 辛い。苦しい。たった一人の姫君を失ってとても苦しいということ。
- ⑪ 未詳。
- ⑫ 誰の目をはばかる必要があるだろうか(いや、その必要はない)。
- ⑬ たった一人の姫君がいなくなってしまうという最悪の事態に、人目を気にしている場合ではないということ。
- ⑭ この世のどこに我が子を可愛く思わない親がいるだろうか(いや、どこにもいない)。
- ⑮ 女性・婦人の総称。「妻」という意味ではない。
- ⑯ 策略・計略。ここでは悪い企みのこと。
- ⑰ 連れ出される。誘拐される。
- ⑱ 十二支の寅。暦法による。以下に出てくる子・牛なども同様。
- ⑲ 時刻。昔は二十四時間を十二支に割り振っていた。

① かくてその後、友年ともとしいつわりなきにより、重ねて弓矢ゆみやはなかりけり。さて国高くにたかの屋形やかたには、近国きんこく・他国たこくを尋ねれど、その行き方かたのあらざれば、その頃都ころみやこにかくれなき、名譽めいよの博士はかせの上手じょうずあり、急ぎ召し寄せ給たまいける。御台みだいあまりの物憂ものうさに、

「早く参れ、安氏やすうじよ。今は誰たれをか恥はじめぬべき。近きちかへよつて事こと問わん。のう、博士はかせ聞き給たまえ。それ世よの中の親おやの子こを思おもう習ならい、いずれか思おもわざるべきや。悲かなしきかなや、みずからは、ただ一生いっしょうに一人ひとりの姫ひめのありけるが、ある夕暮ゆうぐれに女房にようぼうの来きたり、たばかりを知らで、そのまま誘いざないゆかれ、その行き方かたの無なきぞ」とよ。博士はかせ承うけたまわり、

「して御年おんとしは何なん」

と。

⑱ 「寅とらの年とし」

「子牛寅ねうしとら、おっおさてはお十三じゅうさんな。何なんの月つきの、何なんの日ひの、何なんの刻く

その後、友年の言うことにウソがないことがわかり、誤解も解けて以後両軍が戦うようなことはありませんでした。

さて国高の家では、近国・他国をいろいろと調べましたが、姫君の行方は全くわかりません。そこで、都で占いが上手だと評判の安氏という博士を呼んで、占ってもらうことにしました。国高の奥方は、心痛のあまり、

「早く来てくだされ、安氏殿。もうだれにはばかることもありません。聞いてください。世の中の親で、子をかかわいく思わない親がいましようか。私には、たった一人の姫。それが、ある夕暮に女房が来て、だましているのだとも知らないまま連れ去られて、行方不明になってしまったのです」

博士は聞いて、

「で、その姫君は何年の生まれですか」

「とらの年」

「子牛寅、おお、とすると十三歳になりますな。では、何の月の何の日何の刻にお生まれになりましたか」

- ①宝は惜しくない。姫の行方がわかるのであれは、お礼としていくらでも財宝を渡す、ということ
- ②縁側
- ③乳母は、母親に代わって子供を育てる女性。御乳はとくに、位の高い人物の子を育てる乳母のこと
- ④それ以来二度と会っていない
- ⑤当然だ。もつともた。
- ⑥干支の表。暦法で、十干十二支を順に組み合わせ、年・月・日を表すのに用いる。その組み合わせは六十通り
- ⑦木ぎれのこと。算木。占いをするための道具で、長さ約十センチメートルの角柱状の、六本の木
- ⑧整然とはなく、煩雑に。ばらばらに置いたということ。
- ⑨中国の書物『易経』に書いてある原理に基づく占いの方法
- ⑩何かを思いついた時や、納得のいった時などに、両手をぼんと打つ動作のこと
- ⑪現在の京都府と兵庫県東部
- ⑫京都西北にある山で、山城と丹波を結ぶ要地で昔から和歌に読まれていた場所。
- ⑬接続詞。しかし。そうではあっても
- ⑭私。男性が自分のことをへりくだって言うことば
- ⑮都へ帰ること
- ⑯天皇の住むところ。皇居
- ⑰天皇に申し上げること
- ⑱「叡聞」は「天皇や上皇が聞き知る尊敬を現す。いらつしやる

「ご誕生ぞ」

「寅の月の、寅の日の、寅の刻に誕生ぞ。姫が行方のあるならば、数の宝は惜しからじ。生まれてよりもこのかたは、縁より下に降りるだに、御乳や乳母が付き添いで、荒き風だにいといに、別れてよりもこのかたは、また二目とも見ることなし。

あらうらめしの次第や」
と、消入る様にぞ泣き給う。

博士承り、

「御道理なり。理」

とて、六十一のこよみに、八十三の算木をばらりとみだき、易の表をしばらく見て、横手をちようと打ち、

「姫君の御行方、丹波の国大江山に住む、鬼神が業にて候なり。

さりながら御命、某延命久と祈るべし。やがてめでたく御所へ帰入なさしめ奉らん」

と、さも頼もしくも占いて、博士はわが家に帰りける。

さてそれよりも中納言、急ぎ内裏へ上がらる。内裏になれば姫をとられし有様を、ありのままに奏聞あり。帝、叡聞ま

「寅の月の、寅の日の、寅の刻に生まれました。姫の行方がわかりましたら、どんな宝でも差し上げます。生まれて以来、縁から下に降りる時でさえ、乳母やお守りのものが付き添って、強い風にもあてないように大切に育ててきました。もう会えないのではないかと、消え入るばかりに泣いています。博士は、「ごもつとも、ごもつとも」

と言いながら、占いははじめました。六十一の暦を出し、八十三本の算木をひろげ、易の表をしばらく見ていましたが、やがて手を打って、

「姫君の行方がわかりました。丹波の国大江山に住む、鬼神のしわざでございます。いま、私は姫君のお命が末永く続くようにとお祈りいたします。そうすれば、やがてめでたくお家にお帰りになります」と、本当に頼もしく占って、博士は帰って行きました。

さてそれから中納言は、急いで宮中に出かけ、姫君がさらわれた次第をありのままに報告しました。帝もお聞きになり、公卿たちも会議を開いて相談しました。

- ① 貴族の位。公は太政大臣・左大臣・右大臣を指し、卿は大納言・中納言・三位以上および四位である参議を指す。両者が太政官の行為を形成する。公卿は国の政治をとりおこなう役割だった。
- ② 評議して物事を明らかにすること。話し合い。
- ③ それぞれ違っていること
- ④ すべての人々
- ⑤ 第五十代天皇。在位は七八一年〜八〇六年。平安京遷都などを行った。
- ⑥ 御代。時代。「だれそれ天皇が治めた時代」を指して言う。
- ⑦ 坂上田村麻呂。平安初期の武将で、七九七年に征夷大將軍になった。
- ⑧ 伊勢の国（現三重県）にある鈴鹿山のこと。
- ⑨ 先にあつた出来事に従つて
- ⑩ 摂津の国（現大阪府付近）を治める者。
- ⑪ 頼光は人物で摂津の守も務めた九四八年〜一〇二一年。国々の守を歴任した。
- ⑫ 郎等。部下・家来のこと
- ⑬ 渡辺綱と坂田金時は筆頭に数えられることが多い。金時は幼名「金太郎」。
- ⑭ 足柄山の伝説が有名である。
- ⑮ 平井保昌。武勇に優れた弓の名手。大盗賊が保昌の武威に圧倒された有名な話がある。
- ⑯ さしつかえ。支障。「子細は候まじ」で、「何も問題がない」の意
- ⑰ 天皇の命令。詔
- ⑱ 天皇の命令を述べ伝えること。また、その内容や公文書を指す
- ⑲ お前。あなた。対等または目下の人間に対して使う二人称
- ⑲ 丹波の国のこと。現在の京都府中部
- ⑲ 出発
- ⑲ ここでは異形の者・怪物・化け物を指す
- ⑲ 天皇の仰せ
- ⑲ 変化の術を使い、姿を変えることができる化け物
- ⑲ 普通の人間。一般人
- ⑲ 視界に入る。目の前に立ちほだかる
- ⑲ 目に見える
- ⑲ 仏道の修行を妨げる四種の悪魔のひとつ
- ⑲ 疫病をはやらせる神。疫病神のこと
- ⑲ 非常に固い守り

しまして、公卿、詮議まぢまぢたり。中にも五条の大臣申さるるは、

「総じて国高一人に限らず、近年人の妻子を取ることその数を知らず。万民のわざわい国土の大事これなるべし。昔桓武天皇

の御時、田村年人、鈴が山の鬼神を退治す。先例にまかせられ、天下の武將摂津の守頼光に仰せ付けられ、退治あるべし。

相伴う郎党には、定光・末武・綱・金時・保昌とて、鬼神をも手の内ににぎるほどの武者なれば、あつぱれ子細は候まじ」と、ただ手に取るようにぞ申さるる。

帝勅聞ましまし、急ぎ勅使を立てらるる。頼光勅命蒙り、急ぎ内裏に上がらるる。

「内よりの宣旨には、汝は急ぎ丹州に発行し、人を悩ます曲者を、退治せよとの勅諭なり」

頼光勅命蒙りて、

「天晴大事の宣旨かな。まことに鬼神は変化の者なれば、ちりや木の葉に身を変化、凡夫の眼に見つけんことは難かるべし。

眼にさえぎる者なれば、いかなる天魔・疫神なりとも、鉄壁を

五条の大臣が言うには、

「こうして被害にあつて居るのは国高一人ではありません。最近、妻子が行方不明になつて居る例はたくさんあります。皆が困つて居ることで、我が国の一大事であります。その昔、桓武天皇の時代に、田村年人が、鈴が山の鬼神を退治しましたが、この例にならつて、名將摂津の守頼光に命じて退治させるのがよろしいかと存じます。頼光の家来には、定光・末武・綱・金時・保昌といった、鬼神もひねりつぶすほどの武者がたくさんいますから、立派にやり遂げてくれることでしよう」と、先々まで見通しているかのように申し上げました。

帝はそれをお聞きになり、すぐに頼光のもとに勅使をつかわしました。頼光は命を受けるやいなや、すぐに宮中に参上しました。

「ただ今、お使いから、おまえたちは急いで丹波の国に向かい、人々を悩ませている悪鬼どもを退治せよとお聞きしました。私としては、大変名誉なことであると思つております。まことに鬼神は化け物ですから、時にはちりや木の葉に姿を変えたりしますので、ふつうの人間にはなかなか見つけられないものです。しかし、我々ならば、どんな天魔・疫神であっても、鉄壁を踏み破るように退治してしましますから、どうぞご安心ください」

- ①天皇の御心
- ②用意・準備
- ③敵
- ④現在の三重県・和歌山県近辺にかけて流れる熊野川流域を中心とした修験道の聖地。熊野三山
- ⑤当人に代わって神社に参拝すること。この場合は、頼光に代わって綱・金時を熊野権現に参詣させるということ
- ⑥現在の大阪市住吉区にある住吉神社
- ⑦多く。たくさん
- ⑧供とする人
- ⑨引き連れて
- ⑩現在の京都府・男山山頂にある石清水八幡宮のこと
- ⑪願かけをすること。「りゅうがん」とも
- ⑫神前で舞を舞う時にはやしを演奏する男のこと
- ⑬八乙女。神前で舞う巫女のこと
- ⑭神に幣（神に舞う時や、罪や穢れを祓う時に捧げるもの）を捧げること
- ⑮巫女が神前で熱湯に笹の葉をひたし、それを体にふりかけて祈ること
- ⑯神に仕える人。神楽を演奏し、祝詞をあげ、神と人間の仲だちをする人。神官・巫女
- ⑰着物の袖
- ⑱鈴の音と重なるようにして、神様の声がひびいていた
- ⑲神が人に乗り移ったり、夢に現れたりして、その意思を告げ知らせること。またはそのお告げを指す
- ⑳私の住む浄土世界のこと
- ㉑仏や菩薩が人々を救うために、仮に神や人間などの姿となつてこの世に現れること
- ㉒天上・人間・修羅・地獄・餓鬼・畜生の六道の輪廻を繰り返す衆生の身。つまり一般人のこと
- ㉓私が衰えた世界。末法の世
- ㉔この世に生を受けているすべての者に、あらゆる人々
- ㉕石清水八幡宮のこと。ここでは、神が石清水八幡宮がある男山に流れる川に姿を変え、世の中を守っているということ
- ㉖天皇のこと
- ㉗氏（家）の祖先神と、その子孫のこと
- ㉘今現在天下を治めている天皇を指して言う
- ㉙並々ならぬ。格別に
- ㉚お思いになって
- ㉛神のお告げ
- ㉜神仏の霊力によってみる不思議な夢。または夢のお告げ

もふみやぶり、手の下に打ち従え、宸襟を安んぜ奉らん」

と、謹んでお請申し御所を立ち、館を指してぞ帰らるる。支度になれば人々を近付け、

「このたびは常の打手に異なり。神の力を頼まんと、綱・金時は熊野へ代参すべし。定光・末武は住吉」さて、頼光は保昌を伴いて、あまた供人引き具して、八幡の山へぞ参らるる。

お山になれば、鬼神退治の御立願。十二人の神楽男・八人の矢乙女、奉幣を捧げ、神前にて御湯を参らせ給いける。ありがたいがたや、巫覡が袂に鳴る鈴の、神の御声添ひて、新たな御託宣、

「我本地寂光を出でしよりも、垂迹王光の光を現し、分段燈光の暗を照らし、末世の衆生を守らんため、この石清水の清き流れに陰を映し、君も息災氏子繁盛、今上幸い今上幸い、鬼神を早く退治せよ、影身に添うて守るべし」とて神は上らせ給いける。頼光なのめに思し召し、新たに御示現蒙りて、屋形をさしてぞ帰りける。

屋形になれば、定光・末武・綱・金時も、新たに令夢を蒙り、

と、申し上げて宮中を出、館に帰りました。さて、出発の支度をする時になって、人々を呼び、

「今回は、今までとはちよつと相手が違うぞであるから、神々にもご加護をお願いしておかねばならぬ。綱と金時、お前たちは熊野へお参りに行って来てくれ。定光・末武の二人は住吉明神へ行け。」

そう命じたあと、頼光自身は保昌を連れ、たくさんのお供といっしょに、八幡様の山へ参詣に行きました。

岩清水八幡のあるお山では、鬼神退治のためにたくさんの祈願や折禱をとり行いました。十二人の神楽男・八人の矢乙女が御幣をささげ、神のお前で御湯の儀式を行いました。すると、まことにありがたいことに、巫女のたもとで鳴る鈴とともにこの岩清水八幡の神様があらわれ、ありがたいお告げがあったのです。

「私はこの地にあられて以来、末世の人々を守るために、ここ石清水の清き流れに身を寄せて、帝も庶民もともにみな病気もなく幸せに暮らせるよう祈つてきた。安心して鬼退治に行くがよい。いつも影となつてそなたたち一行に付き添い、かならず守つてやるぞ」

そう言つて、神は姿を消したようでした。頼光はとても感激し、霊験あらたかな神のお告げがあったと喜び、館へと帰って行きました。

- ① 神社に参拝して帰ること
- ② 修験道の修行をする人。修験者
- ③ どうにかして
- ④ 知恵を使った計略。賢いはかりごと
- ⑤ 工夫する
- ⑥ 簡単な鎧。袖がなく、腹に巻いて胴体を守る
- ⑦ 順番に
- ⑧ 修験者や行脚の僧が仏具や衣服を入れて背負って歩く物入れ
- ⑨ 一部が緋色（赤色）の鎧
- ⑩ 一尺は約33センチメートル
- ⑪ 一寸は約3センチメートル
- ⑫ 貴人が持つ太刀のこと。佩刀
- ⑬ 何事にも動かされない強い心のこと。これを鎧に例えている
- ⑭ 太刀などを右肩から左のわき下へ斜めに背負うこと
- ⑮ 包み隠すこと
- ⑯ 旅行や外出の時に、すねに巻き付けて足を保護するもの
- ⑰ 編み目が八つあるわらじ。また、編み目がたくさんあるわらじ
- ⑱ たいへんすばらしい。立派だ
- ⑲ 一部が紫色の鎧
- ⑳ 二つに重なっていること。刀に鉄を足して鍛えなおしたことをさす
- ㉑ 「束」は長さの単位。「束は約7.7cm
- ㉒ 同様の。鎧の色と揃いであることをさす
- ㉓ 「玉散る」は水しぶきが飛び散る様子。ここでは、鬼切りの輝くような美しさを水しぶきのきらめく様子にたとえている
- ㉔ 左手。弓を持つほうの手の意
- ㉕ 道具のこと。ここでは、鬼神討伐のために必要な武器などを指す
- ㉖ 24頁に「ささえの酒」とあるものと同じ。
- ㉗ 火打ち石のこと
- ㉘ 修験者や巡礼者がもつ、白木で作った杖

同じ下向を申さるる。頼光仰せけるようは、

「このたびは人あまたにてはよろしからず。以上六人山伏に様を替え、山路に迷う風情にて、鬼が城に乱れ入り、いかにも智略をめぐらして、謀って討つべきなり。用意せよ」「承り候」と、思い思い腹巻きを、次第次第に飾りける。

まあ、まず頼光の笈の中には、らんでん鎖と申して、緋緋の御鎧・獅子王の甲に、血吸と申して二尺八寸ありける金作りの御はかせ、慈悲忍辱の衣の上に、輪束に結んではき、退蔵黒色の脛巾、八つ目のわらじ締めはいて、さもゆゆしくこそ見え給う。

さて、保昌は紫緋の鎧に、岩切りとて四尺八寸ありけるが、二重に金をのべつけて、三束あまりにねじ切り、笈に入れてぞかけてんげり。

綱は萌黄の腹巻きに同じげの甲を添え、鬼切りとて四尺七寸ありける、抜けば玉散るばかりなるを、弓手の脇にぞおほえける。定光・末武・金時も、思い思いの具足を入れ、心々の剣をはき、竹筒と名付け酒を入れ、火打ち付け、竹・ほらの貝、金剛杖

館に着くと、定光・末武も、綱・金時も、ともにあらたかな夢を見て帰って来たことを報告しました。さて、頼光が言います。

「今回は、あまり人数が多くてよろしくない。六人で、山伏に姿をかえ、山路に迷ったという感じで、鬼の城に乱れはいり、なんとか工夫をこらして、だまし討ちにするしかないだろう。さあ、そのつもりで用意するのじゃ。」「うけたまわりました」

と、思い思いの腹巻きをつけ、それぞれに準備をしています。頼光の笈の中には、らんでん鎖・緋緋の鎧・獅子王のかぶと、それに「血吸」と名づけられた二尺八寸の黄金の飾りのある剣、そのうえに、山伏姿の衣を着て、足元は黒いはばきをつけ、八つ目のわらじをはいて、いかにも立派な山伏ぶりです。

保昌の方はというと、紫緋の鎧に、「岩切り」という四尺八寸の剣を笈に入れておられます。綱は萌黄の腹巻きをしてかぶとをつけ、やはり「鬼切り」という名の四尺七寸の刀を左手の脇にはさんで持って行きます。定光・末武・金時も、思い思いの武器をつけ、めいめいの剣をさし、ささえという名の酒を持ち、火打ち石・竹・ほら貝・金剛杖など山伏の道具を持って都を出ていきました。

- ①空と山の境目。稜線
- ②山城国葛野郡南西部（現在の京都市西京区）近辺。桂川流域
- ③一椽を投ぐる間（短い時間をあわす慣用句）と、「車」をかけている。
- ④牛や馬につけ、コントロールするための手綱のこと
- ⑤ここでは「捨てる」の意
- ⑥沓掛。峠の入り口にまつる道祖神などに、馬の沓やわらじなどを奉納して、安全を祈願すること
- ⑦鬼を追うと「古いの坂」がかかっている。「古いの坂」は大江山の北側にある峠
- ⑧「見せる」と「しめなわ」がかけことばになっている
- ⑨「切る」と「切り櫓（しきみ）」をかけている
- ⑩中国の伝説上の山で神仙が住むという。「亀山」とあわせて、たどりつくのが難しい場所とされており、ここでは鬼退治の困難とかけている
- ⑪千秋万歳は祝福のことば。亀山は本来中国東方の海にあり神仙が住むとされた、蓬萊を含む三つの山の総称。また、京都市右京区にある小倉山と峰続きの山の名でもある
- ⑫未詳
- ⑬呼びかけの言葉。もしもし
- ⑭里から離れた山中に住む人
- ⑮どこですか
- ⑯はい。質問を受けて答える時に言う
- ⑰高い山のこと
- ⑱多量に流れ出る血のこと
- ⑲彼方。向こう
- ⑳人間
- ㉑旅の僧。修験者。ここでは、鬼の討伐に来た頼光らが山伏姿であることから、こう言われた

をつきつれて、すでに都を出でらるる。

（頼光山入道行）

はや明け方の山の端に、月も雲かかる影に、かつらの里とかや、さおな車のはかなさは、牛も綱手をほうふらん。勇む心はくつかけの、ふむ駒の足並み運ばせて、栄える鬼おいの坂、猶神力のみじめなば、向こう悪魔を切りんきみ、蓬萊行はいかなれば、千秋万世の亀山に、よろこびの帰宅を急がんと、大江山のふもととなる、かの姫室にぞ着かれける。

これより末は道もなし、いかがはせんと思ふところに、芝刈る男に行き会うて、頼光近付き、

「いかに山人、この国の千丈が嶺・鬼が岩屋はいづくぞや。教えてたべ。」

とありければ、

「さん候、あれあれ御覧候え。まず南に当つてかすかに見ゆる高嶺あり。白く物の見えけるは、恐ろしき鬼が城より流れて落つる滝の水。血汐に見ゆるときもあり。またその嶺のあなたこそ、鬼の在所と聞くからに、人倫さらに行く事なし。のう客僧」

（頼光山入道行）

明け方の山の端に、月がかかるといふかつらの里を過ぎ、時の流れのはかなさを思いつつ、勇む心を押さえながら、馬の足並みを揃えて進みゆくと、やがて鬼追いの坂に着きました。神力によつて、向かってくる悪魔を切りふせようと思ひながら、亀山を過ぎ、大江山のふもとにある姫室というところに着きました。

ここから先は道もないので、どうしたものかと思つているところに、芝刈りの男がやってきました。頼光が近付いて、

「その方。この国の千丈が嶺とか鬼が岩屋とかいうところはどこでしょうかな。教えてくだされ」

「さようでございます。あれを御覧ください。南の方にかすかに見える高い山がありましよう。あそこに白く見えているのは、あの恐ろしい鬼が城から流れ落ちてくる滝の水でございます。時折は、真っ赤な血汐の色に見えます。時折は、真っ赤な血汐の色に見えます。時もあります。その山の峰の向こうに鬼が住んでいるということですが、人間が行くようなところではないと聞いております」

- ①一方の端を持ち上げて、斜めにたてる。枕をそばだてるといふことは、枕を地に落ち着けてゆつくり眠ることができないということ
- ②「喉」のなままった言い方
- ③高い山々がそびえ立っている様子がけ。切り立った斜面
- ④思い悩む
- ⑤非常に恐れる。驚く。苦心する
- ⑥「太平記」巻五、「大塔宮熊野落事」による「山路本ヨリ雨無シテ、空翠常ニ衣ヲ湿ス。向上レバ万仞ノ青壁刀ニ削リ、直下ハ千丈ノ碧潭藍ニ染メリ」による
- ⑦青い苔の生えた絶壁は刀で削ったように高くそびえ。「万仞」はここではとても高い意
- ⑧千丈の下に深い水をたたえた淵は藍で染めたように青々としている。「千丈」はここではとても深い意
- ⑨身分の低い者
- ⑩短い木。たきぎ。また、そのため木に枝を切ることに
- ⑪おじいさん
- ⑫はつきりせず、つかみどころがない

- ⑬紀伊の国（現和歌山県）にあるとされる音無滝がある里。この音無滝は山城（京都）にあるとする説もある
- ⑭現在の三重県。「かけの里」は不明

- ⑮あいつ。酒呑童子を指す

と、教えてこそは通りける。

頼光らいこうなのめに思おぼし召めし、さあらばこの嶺みね越こせやとて、谷たによ嶺みねよと越こされける。人倫じんりんなれば、ある日は高嶺たかねの雲くもに枕まくらをそば立て、岩いわもる水みずにての②の①んどを潤うるおし、峨々ががたる山やまの岨づた伝つたい、露つゆなめらかにして足あしを爪つまた立て、木きの根ねに取り付とき取り付とき、心こころを碎くだき肝きもを消けす。山路さんろ本もとより雨あめ無なうして、空翠くうすい衣ころもを潤うるおせり。見上みあぐれば、万仞ばんじんの青壁せいへき刀つるぎに削けずり、見下みおろせば千丈せんじょうの碧潭へきたん藍あいに染そみたり。耳みみに触ふるるものとは、嶺みねに木伝こづたう猿さるの声こゑ、雪ゆきの下したゆくちりちり水みずの音おと、賤しずがつま木きの斧おのの音おとと、心細こころほそさは限りなし。とある岩間いわまを見れば、芝しばの庵いおりのその中に、翁おきな三人おわします。頼光らいこう立ち寄より、

「いかなる人ひとにてましますぞ。おぼつかなし」

と仰おほせける

「さん候ぞうちゆう、一人は紀州音無里いしきしゆうおとなしさとの者もの。今一人は津つの国くにかけの郡こほりの者もの。また一人は都みやこ近ちかき山城やましろの者ものなるが、この山やまの酒呑童子しゆてんどうじに妻子さいしを取とられ、無念むねんさに、この頃ころここに来きたりてあり。さて、客僧きやくそう達たちをよく見みるに、勅命ちよくめいを蒙こうむり、かれめが打手うってに向むこう給たまう

と、教えてくれたのであります。

頼光は大いに喜び、「ではあの嶺を越えてゆこう」と、谷やら嶺やらを越えて行きまして。とはいえ、頼光も人の子、ある時は雲のそば近くで休み、ある時は岩間を流れてくる水でのどをうるおし、険しい崖を伝いながら露ですべりやすくなったところには足を爪立て越え、木の根にしがみつくといふふうで、並大抵の苦勞ではありませんでした。見上げれば、あたり一面静かで、見下せば深い深い谷底が見えるだけです。聞こえるものといえは、木を伝っていく猿の声と、雪の下を流れる水の音、それに木こりたちが木を伐る斧の音だけで、このうえもなく心細いところでした。

と、岩間を見ますと、そこにある芝の庵のなかに三人の老人がおりました。頼光が立ち寄って声をかけます。

「どなたですか、こんな山奥に」

「私どもの一人は紀州の音無里、もう一人は津の国かけの郡のもの。もう一人は都に近い山城から来たものでございます。この山に住む酒呑童子に妻子を奪い取られ、あまりにも無念なので、ここまでやって来たのです。さて、あなた方はどうやら、帝の命を受けて鬼どもを征伐に向かう一行の方々ですな。我々が案内をいたしましょう。とりあえず、筈をおろし、疲れを休めてください」

①案内する

と思えたり。我々先達申すべし。まず笈を下し、疲れをもらされよ」

頼光聞こし召し、

「近頃御情とこそ存ずれ。いかに面々、しばらく休らえ候え、休らえ候え」

「畏り候」

④芝のひかれた場所

と、その時笈をひたひたと降り、芝井に下りいて休らえ候え。

⑤21頁に「さえと名付け酒」とあるもの

時に竹筒の酒を取り出だし、両三人の翁へは、酒を様々勧めける。翁なのめに思し召し、

⑥方法・計画

「鬼を討つべき計事、客僧達に教うべし。かの鬼つねに酒を呑

み、酔伏したる者ならば、わが身の失するも知らぬゆえ、酒呑童子

と名付けたり。この三人の翁こそ、名誉の酒を持参せり。その

名も神変鬼毒の酒と書く、神の方変鬼の毒と読むなり。この酒

を与え、酔伏したるところを討ち給え。伏さぬ前には必ず御無用」

⑧お酒を入れておく器。とつくり

とて、頼光に下さりける。今一人は長柄の銚子を取り出し、

⑨神さまの時代。日本の神話では昔神様が実在したとされた。人間の時代(人代)が始まるのは神代の后

「これも昔、神代の時、鬼と国争いのありしとき、この銚子にて酒をくみ、鬼神退治し給うなり。口の二つあることは、毒と

頼光はその言葉聞いて、「まことにありがたいお言葉でございます。さあ、皆のもの、しばらくここで休んでいきましよう。」

「かしこまりました。」

と、言つて、一行は笈をおろし、芝のあたりで横になり休んでおりました。そして、ささえの酒を取り出し、三人の老人にもすすめました。老人たちはたいへん喜んで、

「お札に鬼を討つばかりごとを、お教えしましょう。あの鬼は酒が大好きで、飲むといつでも前後不覚になるくらいに酔いつぶれてしまいますから、酒呑童子という名なのです。私たち三人は、ここにとてもよい酒を持って来ております。私の持つて来たのは、その名を「神変鬼毒の酒」といいます。「神の方変鬼の毒」という意味です。この酒を飲ませ、酔いつぶれたところをお討ちなさい。酔いつぶれないうちに戦つてはいけませんよ。」

た。もう一人の老人は長柄の銚子を取り出し、「これもその昔、神代の時代に、鬼と国争いをした時、この銚子で酒をくみ、鬼神を退治したという酒です。」

① 区別

② 例の。ここでは神変鬼毒の酒を指す

③ 大きな鉄のびょうが打たれたがんなじような兜

④ 神道における弓矢の神。八幡神に仏の称号である「大菩薩」をつけたもの。当時は神と仏を結びつける考え「神仏混淆」が流行したため、このような呼び方が生まれた

⑤ 頼光たちが出発前にお参りした、熊野権現・住吉神社・石清水八幡宮の神様のこと。頼光はここで、三人の老人が神様であることに気づいた

⑥ はつきりとあきらかになっていること。ここでは、神様たちがあらわれたことをいつている
⑦ 心から感激して

⑧ ここでは、神様に先導してもらったために不思議な力が働き、楽々と進めたことを指す

⑨ 頼光たちがお参りした神様の名前

薬のへだて^①なり。柄の長くはんべるは、命長えの縁起を形どり、この銚子^②にてくむならば、件の酒は泉となり、飲むともくむともよも尽きじ^③」

とて、頼光にたびてんげり。今一人は星甲を取り出し、

「これも昔、神の戦ありしとき、正八幡大菩薩、悪魔を退け給いしとき、召されたる甲なり。これを頂戴いたして討ち給え。

たとえば万人が力を得、熱鉄を沸かして掛るとも、少しも子細候まじ^④」

とて、頼光にぞ下さるる。

三度頂戴 仕り、さては三社の御神のこれまで現燈明白なりと、感涙肝に命じて、

「のうありがたかりける次第なり。さあらば討ち立て給うべし。我々導き申さん^⑤」

と、先立してこそ歩まれける。高山深き谷までも、夢路をたどるごとくにて、鬼が城の山口なる、細谷川にぞ着き給う。

「此の川を上り給え。やがて程こそ近からめ。一人は熊野の権現住吉の大明神、正八幡大菩薩」

この銚子に口が二つあるわけは、毒酒と薬酒を区別するためです。また柄が長いのは、長生きするようにと縁起をかついだものです。この銚子でくめば、あの酒は泉のようにいくら飲んでも、いくらくんでもなくなることはありません」

といて頼光にわたしました。もう一人の老人は星かぶとを取り出し、

「これもその昔、神のいくさがあった時のものです。正八幡大菩薩が悪魔を退治した時につけていたというかぶとです。これをつけて鬼を退治してください。どんな強い力がかかっても、また熱い鉄をそそがれても、このかぶとを着けていけば大丈夫です」

と云って、頼光にくださったのでした。三度までいただき物がありましたので、頼光もこの三人の老人が三社の神の化身であることを悟り、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

「では、退治に出かけましょう。我々が近くまで案内いたします。」

と、先に立って歩いて行きました。高い山も深い谷も、まるで夢路をたどるようにやすやすと越えることができ、すぐに鬼が城の入り口にあたる細谷川に着きました。

「この川を上って行きなさい。ここからすぐ近くになります。我々は、熊野の権現と住吉の大明神、それに正八幡大菩薩ですぞ」

① 神様をおがむこと

② 中途半端に言うことはなかった、の意。神様の出現はありがたいことだが、これから鬼の城に乗り込む頼光たちのことを考えると、めでたいとはかり言っではいられない、ということ

と、消すがごとくに失せ給う。六人の人々は、帰らせ給う御後
を、ややしばらく礼拝し、川上指してぞ上らるる。この人々の
御有様、ありがたしとも、なかなか申すばかりはなかりけり。

と言うやいなや、そのまま消え去ってしまいました。

一行六人は、神が帰っていったあとをしばらくの間礼拝し、それから、川上を指して上って行きました。その様子は、なんともありがたく頼もしいものでありました。

酒呑童子・大江山 第四段

- ①若い女性
- ②赤く染めた血の色
- ③別の色に染め直す

④あなた

⑤応答の敬語。はい、さようでございます

⑥私
⑦左右近衛府の次官で、中将の次位にあるもの

⑧貴人の乳母（うば）

⑨辛いこと。悲しみ。苦しみ

⑩朝廷に仕える人々

⑪肩から肘までの間。二の腕

⑫嘆かわしい。見苦しい

⑬他人に対する同情の心を表す

⑭堀川は京都市の西部を流れる川

かくてその後、六人の人々は教えにまかせ、川上に上り見たまえば、十七八なる上臈の朱の血汐に染め返したる御小袖、涙と共にすすがる。頼光立ち寄り

「御身はいかなる人にてましますぞ」

「さん候。みずからは都にては花園少将の一人姫にてはんべるが、ある夜鬼神に捕われ、この所に来たりしが、恋しき父母や御乳や乳母に会いもせで、憂きもつらきも留めたり。いまだみずから一人に限らず、公家方の上臈ら、十余人ましますが、酒呑童子という鬼が、悲しきかなや、上臈らの腕を抜き股を削ぎ、酒と名付けて血を搾り飲みけることの浅ましや。いとおしや。堀川の中納言の姫も今朝血を搾られ給いしが、その御小袖をみずからがこれにてすすぎ申すぞ」

と声を上げてぞ泣き給う。

頼光御覧じて、

その後、六人は教えられたとおり、川上へと上って行きますと、十七八の女の人々が真っ赤な血に染まった着物を、涙を流しながらすすいでいました。頼光は立ち寄って聞きました。

「あなたはどのような身分の方ですか」

「はい、私は都の花園少将の一人姫でございます。ある夜鬼神に捕われて、この地に来ましたが、恋しい父母や乳母らに会うこともできず、ほんとうにつらい思いをしています。私一人ではありません。公卿に仕えていた女房など十数人いらっしゃいますが、酒呑童子という鬼が、本当に恐ろしく悲しいことですが、女の人の腕を切ったり、ももをけずったりし、それから血をしばらく出して、酒と名付けて飲むのです。ほんとうにかわいそうなことです。堀川の中納言殿の姫も今朝、血を流されたのですが、その時来ていた着物を、私がこうしてすすぎ洗っているのです。」

と声を上げて泣くのでした。

頼光はその様子を御覧になり、

- ①天皇の命令を伝える公文書
②伴うこと。同行すること

「いと嘆かせ給うなよ。我々帝の宣旨を蒙り、この山の鬼神を退治して、御身達を都へ具足し申さん。鬼を討つべきその時刻、導き給え」

とありければ、姫君聞き給い、

- ③こと、事柄、わけ、由(由)
④そうではあっても
⑤つらいこと

「これは夢かや、現かや。なおその儀にて候わば、さあらば、導き申すべし。さりながら、みずからが今までここに長居して、いかなる憂き目に合はん」
とて泣く泣く帰らせ給いける。

- ⑥普通でない。格別である

頼光なのめに思し召し、

- ⑦相手に呼びかけることば。さあ
⑧そこにいる人たちや、その集団の人たち
⑨岩の間にできた天然のほら穴

「いかに面々あら嬉しや。もはや鬼神は討つたるものぞ。もつとも日暮れぬ先に岩屋に入るべし。急げ急げ」

- ⑩土で塗り固めた垣根
⑪穴を掘る

と言うやいなや程もなく鬼が城にぞ着かれける。用心厳しく打ち見えて、石を畳みて築地をつき、山を穿ちて門を立て、岩を割つて扉となし、さてその内に黒金の門あり。番の鬼どもこれを見て

- ⑬人がほしく思った、人を食いたいと思つた
⑭ことわざ。夏の虫が明るい光にひかれて炎に飛び込んでいくように、愚かな者は、自分から進んで危地に陥れることを例えている
⑮人を誘う時、または自分から思い たった時に発する言葉

「この頃は人を恋びける折り伏し、愚人夏の虫、飛んで火に入るとは、かようのことを言うやらん。いでいで引き裂き食わん」

「そう泣かなくともよい。我らは、帝の命を受けて、この山の鬼神を退治してきたものだ。必ずそなたたちを無事都へ、連れ帰つてやるから安心するがよい。で、その鬼を討つには、いつ頃が一番よいか教えてくれぬか」
と言うと、姫君は、

「これは夢ではないでしょうか、本当のことでしょうか。ああうれしい。そういうことでしたら、お教えします。でも、私がこゝであまり長話をすると、あとでひどい目にあいますので」
と言って、泣きながら帰って行きました。

頼光は満足し、

「さあ、おのおの方、喜んでください。もはや鬼神は討ちとつたのも同然ですぞ。日が暮れないうちに岩屋に入りましょう。さあさあ、急ぎましょう」

と言う間もなく、一行は鬼が城に着きました。城のまわりは警戒厳重で、石を積み重ねて塀のようにしてあります。山をけずって門にしてありますし、岩を割つて扉にしてあります。そのなかに鉄でできた門がありました。

番をしている鬼たちは一行の姿を見て、
「この頃、しきりに人を食いたくなっていたが、ちょうどよい折りにやってきた奴らじゃ。飛んで火にいる夏の虫とは奴らのこと、さあ、すぐに引き裂いて食おう」

- ①身分の低い者を指す
 ②前出の「下」に対し、身分の高い者を指す。この場合は酒呑童子のこと
 ③酒呑童子の意向を聞いてから食べることにしようの意

④何にせよ。とにかく

- ⑤妖怪変化の現れるときに、なまぐさい風が吹くという
 ⑥「雷電」は雷（かみなり）と稲妻。同じ意味の語を重ねて強調する
 ⑦髪を短く切り揃えて結ばないで垂らしておくこと。子供・幼児の髪の毛の形
 ⑧弁慶縞（二種の色糸を縦横に使って格子形に織ったしま）の大きなものを
 ⑨恐ろしさのあまりに、体の毛が上を向いて立つことをいう

- ⑩普通
 ⑪非常に深いことのとえ

と飛んでかかるを、中にも心ある鬼が引き留め

「やあ、しばらくしばらく。かく珍しき酒肴、下にて計らい食

べんより、まず上へ申して御意次第に食べん」

と言う。

「この儀もつともしかるべし」

と童子へかくと申し上ぐ。童子聞いて

「これは不思議の次第かな。いかさま対面申すべし。それこな

たへ」

と申す。

「承り候」

と六人の人々を縁の際まで招じける。その時、生臭き風吹いて、

雷電稲妻しきりにして、前後忘するその中に、背高く、色薄赤

く、髪は禿に押し乱き、大格子織り物に、紅の袴を着て、鉄丈

を杖につき、辺りを睨んで立ったるは、さて身の毛もよだつばかりなり。

童子申さるるは

「わが住む山は常ならず。すいせきちょうの谷より湧き立つ雲

と飛びかかろうとするのを、心ある鬼が引き留めます。

「いや、ちよつと待て。こんなに珍しい御馳走を、我々で勝手に食ってしまうよりも、まずご主人様に申し上げて、そのお指図をおおぐことにしよう」

「なるほど、そうであったな」といふことで、酒呑童子に報告が行きます。童子は聞いて、

「何、これは不思議なこともあるものじゃ。いずれにしろ、そいつらと会って見ることにしよう。こちらへ呼べ」

と言いました。「わかりました」と六人の人々を童子のいる部屋の縁先まで招き入れました。と、その時、生臭い風が吹いて、雷がどどろき、稲妻がしきりに飛び交いました。何やらわけがわからなくなつたと思うその時、部屋のまん中に、背が高く、色は薄赤く、やんちゃ坊主のような乱れた髪型の鬼神が現われました。大格子縞の織り物を着、紅の袴をはき、鉄棒を杖のようにつけています。そうやってあたりをにらみつける様子を見ると、まるで身の毛もよだつばかりでした。

童子が、

①翼で、鳥のこと

②反語。まして(人間は)言うまでもない(II来る)ことができない
③それにしても

④水上。物事の起源
⑤奈良時代の山岳呪術者。葛城山をはじめ、金峰山・大峰山などで修行を重ねた。文武天皇の代(六九七〜七〇七)に、妖術をもつて衆を惑わすというもので、伊豆国(静岡県東部)に流されたという。後代に、修験道に開祖と伝えられる
⑥五鬼。役の行者に仕えた五匹の鬼
⑦山形県東田川郡。出羽三山の一で、修験道の道場として知られている
⑧月山、湯殿山とともに出羽三山の一つ。山岳修験の霊場として有名な
⑨今、奈良県吉野郡。修験道の道場
⑩都を一度見てみたい
⑪一晩中、ずっと
⑫近畿及び中国地方の、瀬戸内海に面する地方。播磨・備前・備中・美作・備後・安芸・周防・長門の八カ国
⑬ただひたすら
⑭同じ木の下に宿り、同じ川の流れを汲むのも、前世からの因縁によるもので、おろそかに思われない
⑮何度も生死をくり返すうちに結ばれた因縁。前世からの縁
⑯終夜、夜どおし
⑰自分の感情・判断が誇張や嘘のものでないことを示す時の、偽らぬ気持ちを表す

の波。霧降り霞んで道もなし。空をかける翼、地を走る獣までの道なければ来ることなし。ましていわんや。人間の身として、
③も天をかけて来るかや。語り聞かん」
と申しける。頼光聞し召し、

「御不審はもつともなり。我らが行のみなかみ、役の行者と言
いし人、道なき山に道をふみ分け、後鬼・前鬼・悪鬼とて三人
の鬼神のあるに行き合ひ、呪文を授け、餌食を与えて育めり。
さればこの客僧も同じ流れを汲む。本国は出羽の羽黒を出で、
⑩大峯山に閉じ籠る。ようよう春にもなりしかば、都一見その
ために夕べ夜をこめ立ち出ずるところに、仙陽道よりふみ迷い思
わずもここに浮れ来て、童子の御目にかかることこれひとえに
⑬役の行者の御引き合わせと存ずるなり。まことに一樹の影、
⑭一河の流れを汲むことも、皆これ多生の縁ぞかし。酒を持た
せて候えば、おそれながら童子へ御酒一つ参らせ上げ、我らも
これにて夜もすがら酒盛して慰めん。一夜の宿を貸し給え」
⑮と実にあるようにのたまえば、童子聞いてもとより望むことな
れば酒と聞くよりよろこびて、

「私の住んでいる山は普通の山ではない。深い谷から雲が湧きあがり、雲から霧が降って霞んでしまうので、人が来られるような道はない。空を飛ぶ鳥も地を走る獣も道がないので、来ることはないのだ。なのに、お主ら、人間の身でありながら、どうやってここまで来たのじゃ。空を飛んで来たのか。話してみろ」

「不審に思われるのは当然です。しかし、我々山伏の先祖にあたる役の行者という方は、道なき山道を踏み分け、後鬼・前鬼・悪鬼という三人の鬼神に呪文を授け、餌食を与えて使っていたといえます。我々も同じ流れをくむもので、もとは出羽の羽黒山の出身ですが、ずっと大和の大峯山にこもって修行しておりました。ようやく春になりましたので、都を一見しておこうと思ひ、夕べ出発したのですが、山陽道のあたりで道に迷ったらしく、思いがけずこのお城に足を踏み入れたというわけです。こうして童子様に御目にかかれましたことは、これもひとえに役の行者様のお引き合わせだと思っております。本当に、一樹の陰、一河の流れをくむこともすべて、多生の縁であると言います。これも何かの縁です。幸い私どもは酒を持っておりまして、よろしければ童子様に、お酒を差し上げたいと思ひます。そして我々もごいっしょして、ここで一晩中酒盛りをして楽しませよう。どうかここで一晩の宿を貸してください。」

① 招き入れる際の掛け声

「それそれ客僧こなたへ」

と縁の上まで招じける。かくて童子は人々に打ち向い、

「さらば童子も客僧達に御酒一つ参らせん。それぞれ」

とあれば、

「承り候」

と十七八なる上臈を二三人つかみ寄せ、痛わしやな、あさま

しや。鵜鷹の獲を打つごとく腕を抜き股を削ぎ、酒と名付けて

血を搾り、盃添えて童子が前に置きにける。童子盃取り上

げ、

「それがし食べ見申さん」

と一つ受けてさらりと干し、頼光に差しければ、頼光盃取り

上げ一つ汲んでさらりと干し、綱にこそは差されける。綱盃

取り上げ、差し受け引き受けて三杯干し、

「しゅつぷう」

と言いて小額をはたと打ち

「さてさてお旦那申す。加賀に菊酒、湯殿山のつまかくれ酒、

羽黒山の隣知らず。熊野山がのほいほい酒とてあまたの名酒

② 鵜や鷹が獲物を捕らえるように

③ 飲食物を人に勧める前に、毒の有無を確認するために、まず自分が飲食すること
④ すっきり飲み干す

⑤ 未詳
⑥ 北陸道七か国の一。現在の石川県

の南半部に当たる
⑦ 山形県中西部の山。月山・羽黒山
⑧ 山形県鶴岡市東方の山。修験道の
霊場として知られ、羽黒派山伏の
根拠地

⑨ 酒をいう、山羽国（山形県）羽黒
山の修験者の隠語
⑩ 紀伊半島の南部、熊野川流域と熊
野灘に面する一帯の地域名。古代
からの霊験の地で熊野三社や那智
滝など名勝が多い

と本心からのことのように言いました。童子はもと酒が大好きですから、いやと言うわけがありません。とても喜んで、

「では、皆様、こちらへ。」

と部屋の中に招き入れました。そうして童子は人々に向って、

「では、わしも山伏殿にお酒を一つ進ぜましよう。これ持ってまいれ」

という、

「承知しました。」

と、十七八なる女房を二三人つかみ取り、かわいそうに、鵜や鷹が獲物つかまえるように、腕を切りをもを削り、その血をしぼって、盃を添えて童子の前に置きました。童子はその盃を取り上げて、

「まず、わしが味見をいたそう。」

と、盃についてさらりと飲み干し、頼光につきましました。頼光も盃を取り上げ、一杯くんで平気な顔で飲み干し、今度は綱に廻しました。

綱は盃を取り上げ、注いでは飲み、注いでは飲みして三杯も飲み干し、

「しゅつぷう。」

と声をあげ、額を打って、

「さてさて、すばらしい酒でございます。加賀には「菊酒」、湯殿山には「つまかくれ酒」、羽黒山には「隣り知らず」。熊野山には「ほいほい酒」といつてたくさん名酒を飲みましたが、いや、この酒はすばらしい酒です。

これこそ名酒でございますなあ。」

①とくに。中でも
②すばらしいごちそうである。とて
もぜいたくなものである

③酒のつまみ

④作る、製造する意。ここでは料理
する意

⑤ついでに、どうせならば

⑥大刀に添えてさす短い刀
⑦勢いよく、または、ためらわない
で物事を行うさま

⑧一片の肉のかたまり

⑨12×15cm(一寸〓約3cm)
⑩味わうこと

⑪指先ではさんで持つ

⑫あたりかまわず勢い込んで食べる
さま

を食べ申したるが、のう就中この酒は、あらおごりかな。あら
おごりかな。これぞ名酒」

とほめにける。

童子なのめによるこび、

「それぞれ。肴はなきか」

とある。今切ったると打ち見えて、腕と股を盤に据え、童子
が前にぞ置きにける。

「それぞれ拵えて参らせよ」

「承る」

とて立つところを頼光抑えて、

「とてものことにそれがし手料理して食べん」

と腰の差添えすばと抜き、ししむら四五寸切り、舌打してぞ賞
観あり。綱御情けの深ければ、

「それがしも」

とて鬼の好物、手の内のししむらをかいつまみ、さも旨そうに
むじりむじりと噛みける。童子見て、

「さてさて客僧はいかなる山に住みなれて、かく珍しき酒肴

と誉めたたえました。童子はとても喜んで、
「おい、なにか酒の肴になるものはないか」
と言いますと、今切ったばかりに見える腕と
ももを台に乗せ、童子の前に置きました。

「それを料理して持つてまいれ。」

「うけたまわりました。」

と、下がるうとするのを止めて頼光は、

「いや、われわれで料理して食べましよう」

と、腰の刀をすばと抜いて、その肉を四五
寸切り、うまそうに舌打して食べました。綱
もすぐに察して、

「では、わたくしも」

と、鬼の好物の手のあたりの肉をつかんで、
さもうまそうに、むじりむじりと噛みました。
それを見て童子は、

「さてさて、山伏殿はどんな山に住んで、こ
ういう肴を食べ慣れておられるのかな。本当
に不思議なことじゃ」

① 食べる

② 当然ですが。もつともですが
③ 私達の修行の常として
④ 情けをかけてくださるものがあるならば。
⑤ 心で望まなくても

⑥ 空(くう)に食(く)うをかけた
⑦ 夢のような世の中のこと
⑧ その身がそのままであるということ
⑨ 「食う」と「空」のかけことば。「涅槃経」に説く「本来空、色即是空」をふまえている。万象はすべて仮有のもので、もともと実有のものではない、有形のものも無形のものにほかならないの意

⑩ 感謝
⑪ 人との交際で、心隔てや警戒心がなくなる

⑫ 前に述べたもの

⑬ 毒味

① 服せられらるるぞ。不思議なれ

その時頼光、

「御不審はさりなれども、我らが行の表として慈悲とて給わる

ものなれば、たとえ心にそまらずとも辞退に及ぶことはなし。殊

にかよの酒肴、本来空の人間、打つも打たれるも夢の戯れ。

⑧ 即身即仏これなり。食うに二つの味わいなし。あらありがた

や」

と礼すれば、童子もかえって頼光に礼をなし、

「心にそまぬ酒肴、参らせけるこそ恥ずかしや」

と、心打ち解け見えければ、その時頼光綱に向つて

「それぞれ」

とありければ、

「承り候」

と、件の酒を取り出だす。頼光仰せけるようは

「おそれながらそれがし持参の酒、童子へ一つ参らせん」

御心見のため、一つ酌んでさらりと干し、童子にこそは差さ

れける。童子盃取り上げ一つ酌んでさらりと飲む。まことに

といました。頼光は、

「御不審に思うのは当然ですが、我々の修行においては、人が好意で出してくださるものはたとえ気に入らないものでも辞退してはいけないと教えております。ことにこんな人間の肉をいただくことは、即身即仏の教えになうもので、なんともありがたいことなのです」

と礼拝をしました。童子もあわてて頼光に礼拝をし、

「お気に入らぬ酒や肴を差し上げて申し訳ないことをしました」

とあやまり、互いにうち解けたように見えました。その時頼光は綱に向つて、

「それ、あの酒を」と言いますと、

「承知しました」

と、例の酒を取り出しました。頼光が、

「おそれ多いことですが、私の持参して来た酒を童子様に差し上げたいと思います」

と言ひ、毒味のために一杯くんでさらりと飲み干し、童子に差し出しました。童子は盃を取り上げ一杯くんでさらりと飲みます。まさにこれは「神変鬼毒の酒」、その味は甘露のようであることに素晴らしいものです。何杯も飲んでいるうちに、

①「神変奇特」と「神便鬼毒」をか
けたもの。「神変奇特」は人間の
知恵でははかり知ることの出来な
い不思議なこと。「神便鬼毒」は
神の方便で鬼を退治すること
中国古来の伝説で、王者がよく世
の中を治めると、天がそのほうび
として降らすという甘味の液

③弓を取る手をいう。左手
④馬の手綱を持つ方の手。右手

⑤掛け声
⑥北陸道七か国の一国。現在の新潟
県本州部分に当たる
⑦寺院や武家で召し使われる少年
⑧恨む
⑨京都市北東部、滋賀県大津市との
境にまたがる山
⑩伝教大師、最澄のこと。日本の天
台衆の祖。(七五八～八二二)
⑪新古今集に出る伝教大師の歌「阿
耨多羅三藐三菩提のほとけたち我
が立つ所に冥加あらせたまへ」を
さす
⑫空海の諡号。平安初期の僧。真言
宗の開祖。書にすぐれ、三筆の一
人といわれる。(七七四～八三五)
⑬機内五国の一つで、現在の大阪府
の東部にあたる
⑭奈良県と大阪府の境、金剛山地に
ある山。修験道最古の霊場
⑮和歌山県伊都郡。真言宗の霊場の
金剛峰寺がある
⑯高僧などの死をさす
⑰俺の生活には勝らないの意

①神変鬼毒の酒、その味甘露のごとくなれば、差し受け引き受け
飲むほどに、

「かよの酒を飲むことは、これが一度のはじめなり。我最愛
の女あり。呼び出して飲ません」

と国高の姫と花園の姫を弓手馬手に置きにける。その時、頼光
「それぞれ」

とあれば、綱承り上臈達へと盛り流す。その時童子立ち上り
「いでいで。我先祖を語り聞せ申さん。本国は越後の者、山寺育

ちの稚児なるが、師匠に妬みあるゆえにあまたの法師を刺し
殺し、その夜に比叡山に行く。『わが住む山』と思いに、伝
教大師という法師、『我が立つ所』とて追い出だす。力及ば

ずこの山に來たりしを、弘法大師という法師に封じ込められ、
敵わずしてそれより河内の国葛城山に籠りしを、ここも封じて

追い出だす。それより弘法は高野山に入定し、その後はおよ
うの法師もなきにより、またこの山に立ち帰り、都よりは欲

しき女を取り寄せ置き伏しぬ。いかなる帝王の身なりとも、こ
れにはよも過ぎざらじ。されども心にかかりしは、都に隠れ

「こんなおいしい酒ははじめてじゃ。せつか
くだから、わが最愛の女を呼び出して飲ませ
ることにしよう」

と国高の姫と花園の姫を左と右に置きました。
その時、頼光が綱に合図をしましたので、綱
は女性たちに酒をついでまわります。
そこで、童子は立ち上り、

「それでは、わが先祖の話を語り聞せてやろ
う。本国は越後、山寺に育った稚児であつた
が、その師を恨むことがあつて弟子たちをた
くさん殺し、その夜比叡山に行った。そこに
住み着こうと思つたが、伝教大師に追い出さ
れ、やむなくこの山に逃げ込んだが、ここも

弘法大師に封じられて居られなくなった。そ
のあと河内の国の葛城山にもついていたが、
ここも封じられて追い出されてしまった。そ
の後、弘法大師は高野山でなくなり、以後こ
れほど法力のある僧はいなくなつたので、ま
たこの山にもどつて来て住み着いたのじゃ。

そうして、都からめばしい女をつかまえてき
てここに閉じ込めてある。どんな位の高い帝
王といえども、これだけの女を手元に置くこ
とはできない。ただ、ひとつ心配なことがあ
る。というの、都に源頼光という名高い大

悪人のつわものがある。その家来には綱・金
時・定光・末武・保昌という五人がいて、
こいつらも油断がならない。去年の春、茨木
童子を都につかわした時、渡辺の綱の手にか
かつて左手の腕を討ち落されたことがあつた。

その腕はなんとか取り返して、もう大丈夫だ
が、あいつらの相手は面倒なので、もうわし

- ①「悪」は悪いこととともに、荒々しく強いことをもさす
 ②強い武士
 ③従者。部下。家来
 ④普通とは違った優れた人
 ⑤羅生門に住んだという伝説上の鬼神。渡辺綱に切り取られた片腕を綱の伯母に化けて取り返したという
 ⑥もう、もはや
 ⑦かわった事情や別状がない
 ⑧他者を卑しめていう語
 ⑨面倒で、煩わしい

- ⑩超人的な不思議な力を持ち、自由自在にどんなことをもなすうる働きや力

⑪顔色

- ⑫「いぶせう」の訛つたもの。気分や秀麗気が晴々しない
 ⑬お下がりがなさい
 ⑭油断する
 ⑮自分たちも退出するぞ

- ⑯鉄で作った杖
 ⑰ひしひしと音を立てる擬声語で、ここでは「騒ぎたてた」の意

なき源頼光とて、大悪人の強者あり。彼が眷属に綱・金時・定光・末武・保昌とて、以上五人の曲者あり。それをいかにというに、去年の春茨木童子を都へ使いしとき、渡辺の綱に行き合い、弓手の腕を討ち落されしが、遂に腕を取り返し、今は早や仔細なし。きやつばらが難しきゆえ、我は都へ行く事なし。この城郭を構えしもきやつばらを防がためなり。いかなる神通を得たる兵者なりとも、ここまではよも来たらじ。客僧いかに」と語るや否や、あらずさまじや、色変わりて、酒呑童子は頼光を目をも離さず打ち眺め

「御身が眼よく見れば頼光かと思えたり。さてその次は茨木が腕を切りし渡辺綱にてあり。残る四人の者どもは定光・末武・金時・保昌かと思えたり。いぶしゆう候、お立ちあれ。これにあり合う鬼どもよ、心許して怪我ばしすな。我らもまかり立ちぬる」と

と鉄杖を押し取り色を変えてぞひしめいたり。頼光ちつとも騒がず、

は都へ行くつもりはない。この城を作ったのも、あいつらの攻撃を防ぐためなのだ。どんな神通力を持った武者といえどもここまでやって来ることはあるまい。山伏殿、どう思われる」

と語るやいなや、すさまじく顔色が変わり、酒呑童子は頼光をじっと見つめて言いました。「そなたの眼をよくよく見れば頼光ではないか。その次にいるのは茨木童子の腕を切った渡辺の綱じやな。残る四人も、定光・末武・金時・保昌であろう。さあ立て。鬼たちよ、油断して怪我をするな。わしも出ていくぞ」

と鉄の杖を持って構えています。

頼光はちつとも騒がず、「失敗は許されぬところだから」と思いながら、にっこりと笑って、

- ①言い訳する、釈明する
②大切な出来事

③「末武」と「末竹」をかけたもの

④不都合なことだ

⑤食物（えさ）

⑥「有情」は情・心のあるもの、すべての生物。「非情」は情・心のないもの

⑦以下は、釈迦の前世に関する雪仙童子の故事。「涅槃経」という経文に記されている

⑧修行者の到達し得る最高位の聖者。これ以上に学ぶ要がないので「無学位」という

⑨「涅槃経」という経文に出ている。万物は流転して常住でない、これがこの世のすべての生物に当てはまること（理）である

⑩四句の経文にまだ残りの二句があるはずだという意味

⑪簡単だけれども

⑫食べる

⑬ほっとした時に思わず口から出る言葉

⑭そんなこと気にしなくてもいい。簡単なことだ

「事を陳じ損じなば、事の大事」と思し召し、にっこり笑って

「これは近頃御情けともなきお言葉かな。日本一の兵者に、この客僧が似たるとや。元竹も末武も名を聞くだにもはじめなり。まして目に見ることはなし。ただ今仰せをよく聞けば大悪人と承る。あら、もったいなや。浅しや。さようの人に似たるもいや。我が行の表には、物の命を助けんため、山路を家とすることは、飢えたる狐狼に食を与え、有情非情を助けんためなり。釈迦牟尼仏の古、羅漢仙人に別れ給い、雪山に入らせ給う。すなわち、御名を雪仙童子と申す。ある時、山路を通らせ給うに、深き谷の底よりも、『諸行無常、是生滅法』と唱う。雪仙不思議に思し召し、谷に下がって見給うに、九足八面の鬼神とて、頭八つ足九つ、さもすさまじき鬼ぞあり。雪仙童子のたまわく、『ただ今唱えし四句の文いまだ二句あるべし。とてもものに残りし文を授けよ』とある。鬼神答えていわく、『授けんことは易けれども、飢に臨んで力なし。何にても肉体を服しなば授けん』と云う。追つてのたまわく、『やれ気なく

「これはなんとまあ情けないことをおっしゃる。この山伏めが日本一と評判の武者に似ていると。頼光の名を聞くのは今がはじめて。まして会ったこともござらぬ。いままうかえれば頼光は大悪人というのですな。なんともったいなことを。我々の修行では山路では飢た狐や狼であつても食を与えます。これは生きとし生けるものを救うためでありましてお釈迦様が羅漢仙人と別れて、雪山にお入りになったとき、雪仙童子と名乗つておりました。ある時、山路を通つていまして、深い谷底から『諸行無常、是生滅法』と唱える声が聞えてきました。不思議に思い、谷に降りて見ますと、九足八面、頭八つ足九つのもんともすさまじい姿の鬼神がおりました。そこで雪仙童子はこうおっしゃいました『いま唱えた四句の経文のあとにもう二句あるはずです。ぜひその二句を教えてください』鬼神の返事は『言うのは簡単だが、腹が減つていて力が出ない。何でもいからおまえの体をお助けしてくれたら残りを唱えてやろう』というものです。雪仙童子は即座に『それはありがたい。なに、肉体は瓦礫のようなもの。こんなきつない体をさしあげれば、尊い経文を知り衆生を救うことができるのだからこれこそ本望というものです。残りの二句を私に授けてくれるのでしたら、いつでもあなたに食われましよう。』鬼神は大いに喜び『では、残りの文を授けましよう』といって『諸行無常、是生滅法。生滅滅以、寂滅以樂』と唱えました。雪仙童子は『ああ、ありがたい』と

- ①石ころのように、価値や用途のないつまらないもの
 ②けがれていて、卑しい
 ③かねてからの願い
 ④あなた

- ⑤一〇項注六参照
 ⑥『涅槃経』という経文に出ている。生滅の迷界から離脱して、寂滅に至って真の安楽がある
 ⑦礼をして拜むこと。仏教では、合掌したりひざまずいたりすること
 ⑧大日如来の略。真言密教の教主で、すべての仏菩薩の本来の姿、すべての徳を統治する存在とされる仏
 ⑨釈尊が尸毘王(しびおう)であった時に、毘首羯摩(びしゅかつま)が鳩に化じて、王の腋下に入り、帝釈天が鷹に化じて、その鳩を返せと迫った。王は鳩の命を助けるために、股肉を裂いて秤にかけ、鳩と同じ重さだけ鷹に与えたという
 ⑩つり合う。相応しい
 ⑪「取る」の尊敬語
 ⑫物事のきわめてわずかなことの例え。転じて、「これっぽっちも」の意
 ⑬懸命になつて物事をする
 ⑭あざむかれ、だまされ
 ⑮まさか

- ⑯ちよつと見た様子
 ⑰かわい、かわいらしい
 ⑱音楽を奏する、舞を舞う
 ⑳ずんと さつと立ち上がるさま

とよ。それ肉体は瓦礫のごとし。石瓦よりむさき身を、今尊
 き文に替えて衆生の本懐に助けんことこそ本望なれ。残りし
 文を授けなば、汝の餌食に我ならん』鬼神なのめによるこび、
 『その儀にて候わば、残りし文を授けん』と『諸行無常、是生
 滅法、生滅滅以、寂滅以楽』と唱えければ、『あら、ありが
 たや』と礼拝し、鬼神の口へ飛び入り給うを中にて救い奉れば、
 鬼はすなわち八大大日、雪仙童子は釈迦牟尼仏。またある時に
 は、これやこの鳩の秤に身をかけしも生けるを助けんためなり。
 これにあり合う客僧達も同じ行にて候えば、何にても文一つ
 授け早々命を召さるべし。露塵程も惜しからじ』
 と肝胆碎きて述べらるる。童子これに謀られ、
 「仰せを聞けばありがたや。きやつめらがこれまではよも来た
 らじとは思えども、常々に心にかかるゆえ、酔いても本心違わ
 ずや。赤きは酒の咎ぞかし。鬼とは思し召されなよ。我らもそ
 なたの御姿、内身には恐ろしけれども、馴れてつぼいは山伏」
 と、唱い奏でずんと立ち、盃を保昌に差す。側なる寅熊童
 子に、

礼拝し、すぐさま鬼神の口の中に飛び入りま
 した。が、その中で童子は救い出されました。
 この鬼は八大大日であり、雪仙童子は釈迦牟
 尼仏であったからです。
 この他、お釈迦様には、鳩の命を救うため
 に自分の肉を与えたという『鳩の秤』
 の話も伝わっています。

ここにいる山伏たちも、同じ修行をしてき
 たものたちですから、何でも結構ですから、
 ありがたい文句を一つ授けてくださるなら、
 いつでも命は差し上げます。露ほど惜しい
 とは思いませんから」
 と言葉を尽くして申し述べました。童子はこ
 の言葉にすっかりだまされてしまい、
 「なるほど、ありがたい教えじゃのう。あや
 つらが、よもやここまで来ることはないとは
 思うものの、いつも気になっておるので、酔
 っついていてもつい出してしまうのじゃ。酒のせい
 ということにして許してくれい。鬼だとは思
 うなよ。わしらもそなたの御姿が、実は恐し
 いのじゃが、なんとか馴れることにしよう」
 と言い、歌いはじめました。

- ① 皇居のある所。即ち、都
② 空（そら）と空（から）をかける
③ 飾りもの

- ④ 「押し返す」と「押し戻す」は同じ意味。繰り返すによる強調。何べんも繰り返すの意
⑤ 芸事や遊び事に手ぎわが悪く下手なこと
⑥ 意味
⑦ 本物であること
⑧ 考えを巡らすこと

- ⑨ 悔しさや怒り、または苦痛などを必死にこらえる

- ⑩ 他から受けた札に対して返すこと

- ⑪ 紫苑（しおん）という花の異名

- ⑫ めでたいこと。お祝いすべきこと

- ⑬ 我慢しきれなくなる

- ⑭ 主君に代わってその事を勤める者、代理の役

「舞え」

とある。ずんと立ってぞ舞をたりける。

「雲井より空山伏が落ち来たり。酒や肴のかざしとぞなる。面白や」

と押し返し押し戻し、不調法とぞしゃべりける。この歌の心は雲井とは都のこと。空山伏とは似か正真か。引きさき食わんという思い入りなり。

「あら賢き鬼めらかな」

と心の内にはおかしけれども、歯を食い締めてどつと賞めてぞ通しけれ。その盃を返札のため石熊童子に差す。綱は立ってぞ舞たりけり。

「年ごとに鬼の醜草生ゆるとも春の花見に切つて散らさん」

と吉慶を祝う。その歌の心を知らずして鬼どもは

「さて面白や」

と感じける。童子座敷に堪りかね

「いかに客僧達、それがしが代官に二人の女を残し置く。こよいは酒を飲んで遊び給え。明日御目にかかるべし」

さらに盃をほうしように差し、そばにいた石熊童子に「舞え」と言います。すぐに立って舞いました。

「雲井からそら山伏が落ちて来た。酒や肴のかざりになるぞ。なんと面白しろいこと。」と何度も無い「お粗末でした。」と座を去りました。この歌にいう雲井とは都のことです。そら山伏とは、にせの山伏か本物かわからないことをいい、それをいずれ引き裂いて食おうと歌ったものなのです。

「なかなか賢い鬼だなあ。」

と、みんな心の中ではとてもおかしく思っていたのですが、歯を食いしばってがまんしておりました。その返札に、盃を石熊童子にさしました。そうして綱も立って舞います。

「年毎に鬼の醜草が生えたとしても春の花見のときに切つてしまおう」

と祝い事のように歌います。歌の真意もわからぬまま鬼たちは「おもしろい、おもしろい」と感心しています。

やがて、酔った童子は、もう座敷に坐つていられなくなりましたので、

①未詳
②寝所

③熱中して他のことを考えない

④今晚
⑤退治する

⑥声
⑦静かにしなさいの意

⑧二項注五参照
⑨武具、主として鎧
⑩鎧、兜などの武具や装束を身につける

と、あらおかの障子を押し開けて夜の伏し戸に差し入りぬ。

あり合う鬼どもこれを見て、ここやかしこに伏したるは余念も
のこそ見えにけり。頼光二人の姫を近付け

「いかに方々。鬼の伏し戸を導き給え。こよい鬼神を平らげ、
明日方々を都へ送り申さん」

「のう、これは夢かや」

「あら音高し。あら音高し。静まり候え。静まり候え」
「のう、その儀にて候わば、御用意あそばせ」

面々とおのおの物具固めける。この人々の心の内、忙がし
きともなかなか申すばかりはなかりけり。

「山伏殿、わしのかわりにこの二人の女を残
していきます。今宵はいっしょに酒を飲んで
遊んでください。では、明日御目にかかるこ
とにしましょう」

と言って、障子を開け、寝室に入っていくま
した。そこにいた鬼たちはそれを見て、あち
こちに横になって寝てしまいました。

頼光は二人の姫を近くに呼び、

「さあ、お二方、鬼の寝所に案内して下さい。
今晚、鬼神を退治し、明日皆さんを都へ送り
返しますから」

「ああ、これは夢でしょうか」

「しつ。声が大きい。静かに。静かに」

「わかりました。では、どうぞいくさの支度
をしてください」

そこで、一行はそれぞれに持参したよろい
かぶとを付けて、身を固めました。

この人々の心のうちは、いままさにはやり
たつ思いでありました。

酒呑童子・大江山 第五段

- ① 切られてもけがをしないように鎧の下などに着る、小さな鎖で作った下着
- ② 強度増加のため、一つの鎖に四つの鎖を通して輪違いになるように組んだ鎖。「八重鎖」「南蛮鎖」とも札(さね)を緋色の緒でつづつた鎧
- ③ 獅子王の飾りの付いたかぶと
- ④ 三つの神社。熊野・住吉・八幡(第三段参照)
- ⑤ 鉢の継ぎ目の鉦が大きくて、星のように見える甲
- ⑥ 仏菩薩を心から信じ、祈るときに呼びかけの言葉
- ⑦ 「祈念」。いのること
- ⑧ 「はく」は刀を腰に着けること
- ⑨ 岩の横穴を人の住まいにしたもの。酒呑童子の住みか

- ⑩ 地獄で、亡者を懲らしめる鬼
- ⑪ 殺人を犯した者が落ちる地獄。体を裂き砕かれても涼風ですぐもとの体にもどり、また体を裂き砕かれるという苦しみを何度もくり返す地獄
- ⑫ すべての衆生を仏の道に導き、救う菩薩
- ⑬ 僧などが持ち歩く杖。地藏菩薩の杖は頭が輪状で、そこに数個の鉄の輪が付けてある。「子やす物語」に、地藏菩薩が熱鉄の地獄に入り、錫杖で釜を割り、そこに入っていた罪人を仏の国へと導くことが書かれている

かくてその後、頼光出で立ちは、肌には鎖の帷子に、らん鎖と申して、緋緘の御鎧、獅子王の甲に、同じく三社の御神より給わりし星甲を着、血吸という剣を差し、南無八幡大菩薩と心中に祈念して、先に出でさせ給いける。

残る五人の人々も、思い思いの鎧を着、心々の太刀をはき、女房達を先に立て、岩屋をさしてぞ入り給う。時に定光声をひそめ、

「鬼に取られし者あらば、ひそかにこれへ出でよ」

とあれば、その時岩屋の内よりも、
「我をも助け給われ」

と、裾や袂にすがりついたる有様は、まことに罪深き罪人が獄卒の手に渡り、等活地獄に落とされしを、地藏菩薩の錫杖にて、救い給うもかくやらん。

女房達の案内にて、岩屋の内を見てあれば、十七、八なる上臈

さてその時の頼光の出で立ちは、肌ならんでん鎖の鎖かたびらを着、緋おどしの鎧、しし王のかぶと、それに三社の神様からいただいた星かぶとを重ねて着け、血吸という剣を差しています。「南無八幡大菩薩」と心の中に祈って、真つ先に出ていきました。

残る五人の人々も、思い思いの鎧を着、それぞれ自慢の太刀を腰につけ、女房達を先に立て、岩屋を目ざして入っていきました。そのとき定光は声をひそめて、「鬼にとらえられたものがあるならば、音を立てずにこちらの方へ出ていらつしやい」

と言いました。すると、岩屋の内から「私も助けてください」と言いながら、すそやたもとにすがり付くものがたくさんいました。罪ふかい罪人が地獄の鬼の手に渡され、等活地獄に落とされた時、地藏菩薩が錫杖でお救いなさった時もきつとこのようであつたらうと思われたことです。

① 血でまつ赤に染って

の、腕を抜かれ、股を削がれ、朱に染みてぞおはします。

頼光御覧じて、

「あれは誰やの姫君ぞ」

とあれば、

② 堀川の中納言の姫

②「堀川」は京を南北に流れる運河。「中納言」は太政官の次官。(御伽草紙「酒吞童子」では「堀河の中納言」。堀河家は天正十三年に始まり、時代が合わない。)

と申さるる。

頼光立ち寄り、

「いかに姫君、皆々都へ帰らせ給うが、御身は上らせ給わぬか」

とあれば、痛わしや姫君は、かすかなる息の下よりも、

「あら恥ずかしや浅ましや。かくなり果つる有様を、見せ参ら

するはかなさよ。あらうらやましの人々や。我は昨日の昼の頃、

腕と股を削がれ、いまだ命の消えやらで、かく苦しみを受ける

こと、哀れと思し召されよ」

と、消え入るようにぞ泣き給う。落つる涙のひまよりも、

「いかに方々、都へ上らせ給いなば、父母の御方へ、片見を事

伝て申すべし。この黒髪を切つてたべ」

頼光、

女房達の案内で、岩屋の内を見ると、十七、八の女性が、腕を切られ、ももをそぎとられ、まつ赤に血に染まっていました。頼光はこれをご覧になって、

「あれはどちらの姫君か」

と問いますと、

「堀川の中納言の姫君です」

という返事でした。頼光が近寄って、

「どうですか、姫君。皆は都へ帰りますが、

そなたはどうですか。お帰りになれますか」

と尋ねたところ、かわいそうに、姫君は、か

すかな息の下から、

「ああ恥かしくみじめな姿をお目にかけます。

こんなになってしまった姿をお見せするなん

てなんとふがいないことでしょう。それにし

ても、皆様がうらやましいことです。私は昨

日の昼頃、腕とももをそがれ、まだ死ねない

で、このように苦しみを受けております。あ

われとお思ください」

と、消え入るようにお泣きになります。姫は

涙を流しながら、

「どうか皆様、都へお上りになるならば、私

の父母に形見をこすげたいものです。どう

かこの黒髪を切つてください」

- ① 絹製の綿の入った着物。今の着物の元になったもので、袖が小さい。
 ② わたし。
 ③ 死ぬとき。
 ④ 雪の重みで折れた竹。竹はしなうので折れにくいのが普通なので、普通でないこと、さかさまな事のこととえに言う。
 ⑤ 普通とは逆であること。親より子の姫が先に死ぬこと。
 ⑥ 死後。
 ⑦ おろそかにせず。必ず。

「それぞれ切って参らせよ」

「承り候」

と、やがて切って参らせける。

「またこの小袖は自らが、今わの時までも、身にまといける小袖なり。母の方へ届けてたべ。雪見の窓の折れ竹の、世は逆さまのことなれど、我を見るよと思し召せ。後世を弔て給われと、

懇ろに届けてたべ」

と涙と共に申さるる。

上臈達は取り付いて、

「いとおしの御事や。かく恐ろしき地獄にも、御身に心が引かされて、後に心が残る」

とて、すがり付いて嘆かるる、物のあわれと聞えける。

頼光御覧じて、

「げに道理なり。さりながら、心強く待ち給え。追っ付け迎いをよこし申さん。心強く待ち給え」

と、女房達を先に立て、童子が寝屋へぞしのばるる。

宮殿楼閣打ち過ぎて、鉄の御所と名付け、くろがねにて扉を

- ⑧ 宮殿
 ⑨ 高く
 ⑩ 鉄

頼光が

「さあさあ、切ってさしあげなさい」

と言うと、

「わかりました」

と、すぐに切ってさしあげました。

「それと、この着物は私が死ぬ間際まで身に着けていたものです。母に届けてください。雪見の窓の折れ竹のたとえのように、世間の普通とは逆に、子の私が先に死にますが、私の形見だと思ってください。死後をよく弔ってくれるようにと、必ず届けてください」と涙ながらに言います。

女たちはすがりついて、

「かわいそうなことです。ここは恐ろしい地獄そのものですが、でも、あなたのことが気になって、あとに心が残りますよ。」
 と言っただけです。本当に憐れなありさまで。

頼光はその様子を御覧になって、

「心をしっかりとお持ちなさいよ。すぐに迎えをつかわしますからね。心強く待っていないさい」

と言って、女房達を先に立て、童子の寝屋へと忍び入りました。

①銅
②特別な才能のない普通の男

③「格子」は細い角材を縦横に井の形に組んだもの。「そま」はその隙間のことか

④十尺。約三メートル

⑤まぶたのふちにある毛

⑥怖さやで体じゅうの毛がさかだつ

⑦頭・両手・両足、または頭・頸・胸・手・足。全身

⑧わけはない。かんたんだ

⑨両方に

⑩鬼神は道にはずれたことほしないのに

⑪わめく

⑫刀で切るとききの音をあらわす語

かまえ、赤がねの門差し、なかなか凡夫の身としては、内へ入るべきようはなかりけり。

格子のそまを見てあれば、灯火かすかに挑げ、酒呑童子が有様は、宵のかたちに引き替え、その丈一丈ばかりにて、手足は熊のごとくなり。髪は赤くて逆さまに生い、まつ毛茂り、四方へ手足の投げ出だし、ゆたかに伏したる有様は、身の毛もよだつばかりなり。内へ入るべきようもなし。

いかがはせんと思ふところに、三社の御神現れ給い、「いかに頼光心安かれ。童子が五体を八方に繋ぎてあり。切るとも突くとも子細はあらじ。まず頼光は首を切れ。残りし者は手足五体を切るべし」

と、門を双に押し開き、消すがごとくに失せ給う。

人々よろこびみだれ入り、その時童子目を見し、「情なしよ、客僧達。鬼神に横道なきものを」

と、大声上げておめく。山も崩れるばかりなり。

頼光刀振り上げ丁と切る。五人の人々も手足五体をずたずたに切る。その時童子が首、頼光の星甲をめがけ喰い付いたり。

宮殿や楼閣を通り過ぎて、鉄の御所という名の御殿に着きました。そこは鉄で扉をつくり、銅のかんぬきを差し、中々普通の人間は入れそうにないようすです。

格子の隙間から見ると、灯火をかすかにともしてあります。酒呑童子のありさまは、宵の姿と大違い。そのたけは一丈ほどで、手足は熊のようすです。髪は赤く逆さまにはえ、眉毛はぼさぼさで、四方へ手足を投げ出し、ゆつたりと寝ているありさまは、身の毛もよだつほどです。

内へ入ろうとしてもどうしようもなく、どうしたらよいかと思つているところに、三社の神様たちが現れ、

「これこれ、頼光よ安心しなさい。童子の五体は八方につないである。切つたり突いたりしたとしてもわけはない。まず頼光は首を切れ。残りのものは手足や五体を切るがよい」と、門を両方に押し開き、かき消すようになくなりました。

人々は喜んで乱れ入りましたが、その時童子は目をさまし、

「情ないことをする、山伏殿。鬼神は道にはずれたことほしないのに」

と、大声上げてわめきます。その声は山もくずれるほどです。頼光は刀をふり上げてずばつと切りつけました。五人の人々も手足や五体をずたずたに切りました。

① 衆生を救うための手段

② 家来
③ 任せておけ

④ 酒呑童子の仲間の鬼の一
⑤ 渡辺綱
⑥ しめた
⑦ 「かへしける」か

⑧ 天皇

⑨ かずかずの

⑩ 千年も万年も。長生きを願い祝う言葉
⑪ これ以上言うことはなかった

人々立ち寄り、切り給う。されども神の方便にて、その身に子細はなかりけり。

眷属どもが余さじと、我も我もとかかり合う。「心得たり」と言うままに、四方へぱつと追い散らし、ありし所へさつと引く。

時に茨木童子余さじと駆け来たる。綱は「得たりやおう」とむずと組み、上を下へとかえしける。茨木力強かりけん、綱を取つて押え、ただ一口とせしところを、頼光走りかかつて丁と切る。残りし鬼ども押つ伏せ押つ伏せ切り伏する。

さてそれよりも童子が首を都へ持参し、帝へ差し上げ奉る。数の御褒美下さるる。

さてその後は国も豊に治まりける。

千秋万歳めでたしともなかなか申すばかりはなかりける。

とその時、童子の首が、頼光の星かぶとを目がけて喰い付きました。人々は近寄り、それを切りました。神のおかげで、頼光の身にはなんのケガもありませんでした。

童子の仲間の鬼どもが皆殺しにしようと、我も我もと討ちかかってきます。頼光は「まかせろ」と言うと同時に、四方へぱつと追い散らし、もとの所へさつと引きます。

その時、茨木童子が一人も逃すまいと走ってきました。綱は「しめたぞ。」と、むんずと組み、上になり下になりころり回ります。茨木童子の方が力が強いらしく、綱を取つて押え、ただ一口に喰おうとするところを、頼光が走りかかつて、ずばつと切ります。残った鬼どもも、追い伏せ追い伏せ切り伏せてしまいました。

そうしてすべての鬼を退治したあと、童子の首を都へ持参し、帝に差し出したのです。帝は喜んでたくさんの御褒美を下さいました。それ以後この国は豊かに治まっていたということです。千秋万歳めでたしとは、まさにこのことであります。

尾口のでくまわし教材作成委員会委員

木越 治（金沢大学文学部文学科教授）

道下甚一（東二口文弥人形浄瑠璃保存会会長）

中内幹雄（深瀬のでくまわし保存会事務局長）

木田 清（白山市教育委員会文化課文化財係長）

協力者

土谷 梓（金沢高等工業専門学校教諭）

西尾 素（金沢大学大学院文学研究科修了）

金 永昊（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程在学）

木越秀子（金沢大学大学院文学研究科在学）

高橋毅志（金沢大学文学部四年）

上田泰司（金沢大学文学部三年）

平能一創（金沢大学文学部三年）

丸井貴史（金沢大学文学部三年）

山宮有祐（金沢大学文学部三年）

山口一男（東二口文弥人形浄瑠璃保存会）

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

酒呑童子・大江山

発行 平成二十年三月

編集 尾口のでくまわし教材作成委員会

発行 加賀の民俗文化財活用委員会

委員長 喜田紘雄（白山市教育委員会教育長）

石川県白山市殿町三十九 白山市教育委員会

文化課内 TEL 076-274-9573

印刷 能登印刷株式会社 金沢市武蔵町七番十号